第三巻目次

小説三

にごりえ

一

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて來るからさう思ひな、ほんとにお湯なら歸りに屹度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言譯しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ來る氣もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて閾をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御

逃懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい　燒棒杭に何とやら、又よりの戻る事もあるよ、心配しないで　呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私には技倆が無いからね、一人でも逃しては殘念さ、私のやうな運の惡い者には　呪も何も利きはしない、今夜も又　木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん〳〵と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて　唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭らしきものなり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりとして洗ひ髮の大島田に　新わらのさわやかさ、頸元ばかりの白粉も榮なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて烟草すぱすぱ長烟管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に　引かけ帶は黑繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處と見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの髷の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて、

居るに、大抵におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出來るもの、かな、そして彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛紜があらうとも縁切れになつてたまるものか、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑つてお前なぞは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團扇を取つて足元をあふぎながら、昔は花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つておいでと夕ぐれの店先にぎはひぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壜か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪を煽く音折々に騷がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客樣は手

前店へお出かけを嫌ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商賣がらを心得て口取り燒肴とあつらへに來る田舍ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際ては存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方のないもの面ざしが何處となく冴えて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いてもいゝとて軒並びの羨み種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落魄れては根つから良いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ねえ左樣ではないか、お内儀さんがあるといつ

て叱られるものかね、構ふ事はない呼出してお遣り、私のなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは其れとは違ふ、料簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一つにならうとは思ふまい、これだもの猶の事呼ぶ分に仔細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが來るだらうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるがいゝ、何の人お孃樣ではあるまいし御遠慮ばかり申してなるものかな、お前は思ひ切りが善すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなき歟俯向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが惡いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫にもつなどゝ考違ひをされてもならない、これは昔の夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞つて源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め止めといひながら立あがる時表を通る兵兒帯の一群、これ石川さん村岡さんお

力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲かゝり、素通りもなるまいとてずつと這入るに、忽ち廊下にばた〳〵といふ足音、姉さんお銚子と聲をかければ、お肴は何をと答ふ、三味の音景氣よく聞えて果は亂舞のおともまじりぬ。

二

さる雨の日のつれ〴〵に表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉へずば此降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでもやりませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一徳、例になき子細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民かと問へば何うでござんせうかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左樣おもふて居て下され、お華族の姫樣が手づからのお酌かたじけなくお受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置つぎといふが有るものか、それは小笠原か、それは何流ぞとい

上に、お力流とて菊の井一家の作法、疊に酒のまする流儀もあれば、大平の蓋であほらする流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよ〳〵面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄まじい物語があるに相違なし、たゞの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覧なさりませ未だ鬢の間に角も生えませず、其やうに甲羅は經ませぬとてころ〳〵と笑ふを、左樣ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずば目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりますよ天下を望む大伴の黒主とは私が事とていよ〳〵笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしくなりて私だとて人間でござんすほどに少しは心にしみる事もありまする、親は早くになくなつて今はほんの手と足ばかり、此樣な者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持ちませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此樣な事して終るのでござんしようと

投出したやうな詞に無量の感溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむら
ふ樣子の見ゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊に
お前のやうな別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乘れさうなもの、それと
も其やうな奧樣あつかひ蟲が好かで矢張傳法肌の三尺帶が氣に入るかと問へば、
どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先樣が嫌なり、來いとい
つて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召しましやうが其日送りでご
さんすといふ、いや左樣は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやら
がよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだ
といふに、あゝ貴君もいたく穿鑿なさります、馴染はさら也、手紙のやりとり
は反古の取かへッこ、書けと仰しやれば起請でも誓紙でもお好み次第さし上まし
やう、女夫約束などゝ言つても此方で破るよりは先方樣の性根なし、主人持なら
主人が怖く親持なら親の言ひなり、振向いて見てくれねば此方も追ひかけて袖を
捉へるに及ばず、それなら廢せとてこれ限りに成りまする、相手はいくらもあれ
ども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る邊なげなる風情、もう此樣な話は

隨しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が來るに、おい此娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が來るに閻魔樣へお參りが出來まいぞと笑へば、それだとつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商賣を當てゝ見せうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いえそれには及びませぬ人相で見ますると如何にも落つきたる顔つき、よせ〳〵じつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員樣がありますものか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒美だと懷中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は　御大身の

御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商賣などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乘せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、皆の者に祝儀でも遣はしましやうとて答へも聞かずずん／＼と引出すを、客は柱に凭かゝつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大抵におしよといへど、何宜いのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて殘りは一同にやつてもいゝと仰しやる、お禮を申して頂いてお出でと撒散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふては居ず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、難有うございますと攫さらつて行くうしろ姿、十九にしては老けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の惡い事を仰しやるとてお力は起つて障子を明け、手摺に寄つて頭痛をたゝくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がございました、此品さへ頂けば何よりと帶の間から客の名刺を取出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには寫眞をくれとねだる、

此次の土曜日に來て下されば御一處にうつしましやうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織を着せながら、今日は失禮を致しました、又のお出を待ますといふ、おい程の善い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつ〳〵と立つて梯子を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛防をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ、又形のかはる事もありまするといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の主人も駈出して唯今は有がたうと同音の御禮、頼んで置いた車が來しとて此處からして乘り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光と知られて、後にはお力ちやん大明神これにも有がたうの御禮山々。

三

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實體なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈竟なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懷かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの樣

子を、朋輩の女子共に岡燒ながら弄かひては、力ちやんお樂しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奧樣とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廢めにおし人がらが惡いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うだらう氣違ひになるかも知れないとて冷かすもあり、あゝ馬車に乘つて來る時都合が惡いから道普請からして貰ひたいね、こんな溝板のがたつくやうな店先へそれこそ人がらが惡くて橫づけにもされないではないか、お前方も最う少しお行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとずば〱といふに、エ、憎らしい其もの言ひを少し直さずば奧樣らしく聞えまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せやうとて朝之助の顏を見るより此樣な事を申して居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑で呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此力と思召さぬか、私に酒氣が離れたら坐敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと

察して下されといふに成程々々とて結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下座敷へは何處やらの工場の一群、丼たゝいて甚九かつぽれの大騒ぎに大方の女子は寄集つて、例の二階の小座敷には結城とお力の二人限なり、朝之助は寢ころんで愉快らしく話しかけるを、お力はうるさゝうに生返事して何やらん考へて居る樣子、何うかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、ナニ頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いゝえ、血の道か、いゝえ、それでは何だと聞かれて、何うも言ふ事は出來ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふてよさゝうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此樣な事を思ふのですといふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ噓でも宜いさ、よしんば造り言にしろ、斯ういふ身の薄命だとか大抵の女は言はねばならぬ、しかも一度や二度逢ふのではなし其位の事を告げたとて仔細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前

に思ふ事のあるはめくら按摩に探らせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下座敷より杯盤を運び來し女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行きたくないからよしてお呉れ、今夜はお客で大變に醉ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出來ませぬと斷つてお呉れ、あゝ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかえ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら、御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふがよい、何なら此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話の邪魔はすまいからといふに、冗談はぬきにして結城さん貴君に隱したとて仕方がないから申しますが町內で少しは巾もあつた蒲團やの源七といふ人、久しく馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の

小さな家にまい〳〵つぶろの樣になつて居まする、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに來る歳ではなけれど、緣があるか未だに折ふし何の彼のといつて、今下座敷へ來たのでござんしやう、何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござりますとて、撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと嬲る、あゝもう歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあ其樣な處でござんしやう、お醫者樣でも草津の湯でもと薄淋しく笑つて居るに、御本尊を拜みたいな俳優で行つたら誰の處だといへば、見たら吃驚でござりましやう色の黑い脊の高い不動さまの名代といふ、では心意氣かと問はれて、此樣な店で身上はたく程の人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、それにお前は何うして逆上せた、これは聞き處と客は起かへる、大方逆上性なのでござんしやう、貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥樣のお出來なされた處を見たり、ぴつたりと御出のとまつた處を見

いつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手の仕合は三尺許の椽の先に草ぼう〳〵の空地面、それが端を少し囲つて青紫蘇、ゑぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が所縁の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生ゑ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝のあたりは目立ぬやうに小針のつぎ當、狭帯きりゝと締めて蝉表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての勉強せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、しばしの手數を省かんとて數のあがるを樂しみに脇目もふらぬ様あはれなり、もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも又何處を歩いて居るかしらとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をぱちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の椽に持出し、拾ひ集めの杉の葉を被せてふう〳〵と吹立れば、ふす〳〵と烟たちのぼりて軒端にのがれる蚊の聲凄まじゝ、太吉はがた〳〵と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へ

でも行はしないかと何の位案じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立てゝ源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつたでしやう、定めて歸りが早からうと思ふて行水を沸かして置きました、ざつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あいと言つて帶を解く、お待お待、今加減を見てやるとて流しもとに盥を据ゑて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりとしてお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉が待つて居ますからといふに、おゝ左樣だと思ひ出したやうに帶を解いて流しへ下りれば、そゞろに昔の我身が思はれて九尺二間の臺所で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん背中を洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おい／＼と返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしさば／＼の浴衣

を出して、お着かへなさいましと言ふ、帶まきつけて風の透く處へゆけば、妻は能代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小丼に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよいと擔ぎ出す、坊主はおれが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとて茶碗を置けば、其樣な事がありますものか、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも惡うござんすか、それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無いやうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな眼をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分で思ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さへ出來たら昔のやうに可愛がつても呉れましやう、表を通つて見ても知れる、白粉つけて美い衣類きて迷ふて來る人を誰れかれなしに丸めるが彼の人達が商賣、あゝおれが貧乏になつたから構ひつけて呉れぬなと思へば何の事なく濟ましやう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、

本町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を殘らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に惡い事が浸みて遂ひには土藏やぶりまでしたさうな、當時男は監獄入りしてもつそう飯たべて居やうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌して居まする、あれを思ふに商賣人の一徳、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、それこそ路頭に迷はねばなりませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出來やうなら、お力はおろか小紫でも揚卷でも別莊こしらへて圍ふたら宜うござりましやう、もう其んな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んで仕舞ましたといふに、みれば茶椀と箸を其處に置いて父と母との顏をば見くらべて何とは知らず氣になる樣子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうになるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、い

やおれだとて其樣に何時までも馬鹿では居ぬ、お力など〻名ばかりも言つて呉れるな、いはれると以前の不出來しを考へ出していよ〱顏があげられぬ、何の此身になつて今更何をおもふものか、飯がくへぬとてもそれは身體の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬゆゑ小僧も十分にやつて呉れとて、ごろりと横になつて胸のあたりをはた〱と打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の熱げなり。

五

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何處にからくりのあるとも見えねど、逆さ落して血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘える聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃はちよち〱あわ〻の可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる者なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に眞からの涙をこぼして、聞いておくれ染物屋の

辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まはして、見たくもない往來へまで擲ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた料簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも拵へる仕覺をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおい〳〵と空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて母さんと言ふは眼の惡い人だから心配をさせないやうに早く締つてくれゝば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく〴〵奉公が厭になつてお客を呼ぶに張合もない、あゝくさ〳〵するとて常は人をも欺す口で人のつらさを恨みの言葉、頭痛を押へて思案にくれるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔樣へのお參りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもつて嬉しさうな顏してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居るのであろ、私が息子の與太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何處へ行つて何んな事して遊ばうとも定めし人が羨ましかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此樣な身

になつて恥かしい紅白粉、よし居處が分つたとて彼の子は逢ひに來ても呉れまじ、去年向島の花見の時女房づくりして丸髷に結つて朋輩と共に遊びあるきしに土手の茶屋であの子に逢つて、これ〳〵と聲をかけしにさへ私の若くなりしに呆れて、阿母さんでございますかと驚きし樣子、まして此大島田に折ふしは時好の花簪さしひらめかしてお客を捉へて串戯いふ處を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蠟燭やに奉公して居まする、私は何んなつらき事ありとも必らず辛防しとげて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に樂をばおさせ申します、何うぞそれまで何なりと堅氣の事をして一人で世渡りをして居て下され、人の女房にだけはならずに居て下されと異見を言はれしが、悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の臺所を這ふも柔弱の身體なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、此樣な事して日を送る、夢さら浮いた心では無けれど言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪はじきするであらう●常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕ぐむもあるべし、菊の井のお力とても惡魔の生れ變りにはあるまじ、さる仔細あれ

ばこそ此處の流れに落こんで嘘のありたけ串戯に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に、螢の光ぴつかりとするばかり、人の涙は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人ありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ餘處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き涙、これをば朋輩にも洩らさじと包むに、根性のしつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蜘の絲のはかない所を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客人入込みて都々一端歌の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき胴間聲に霞の衣衣紋坂と氣取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつた〳〵と責められるに、お名はさゝねど此坐の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんや〳〵と喜ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へ行く何處へゆく、逃げてはならないと座中の騒ぐに照ちやん高ちやん少し頼むよ、直き歸るからと

てずつと廊下へ急ぎ足に出でしが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれるものなら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ厭だ厭だ厭だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、靜かな、靜かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ厭だ／＼と道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、お祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも憐れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふかと一口に言はれて仕舞ふ、えゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬな

れば、分らぬなりに菊の井のお力を通して行かう、人情しらず義理しらずか其樣な事も思ふまい、思ふたとて何うなるものぞ、此樣な身で此樣な業體で、此樣な宿世で、何うしたからとて人並では無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞するだけ間違であろ、あゝ陰氣らしい何だとて此樣な處に立つて居るのか、何しに此樣な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もうもう歸りましやうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶら〱歩けば、行かよふ人の顔小さく〱擦れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がやがやといふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は人の聲、我が考へは考へと別々になりて、更に何事にも氣のまぎれる物なく、人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは廣野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのかと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何處へ行くと肩を打つ人あり。

六

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚きし顏つきの例に似合ぬ周章方がをかしきとて、から/\と男の笑ふに少し恥かしく、考へ事して歩いて居たれば不意のやうに慌てゝ仕舞ました、よく今夜は來て下さりましたと言へば、あれほど約束して待てくれぬは不心中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言譯は後にしまするとて手を取りて引けば彌次馬がうるさいと氣をつける、何うなり勝手に言はせましやう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騷ぎはげしく、お力の中坐したるに不興して喧しかりし折柄、店口にておやお歸りかの聲を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法があるか、歸つたらば此處へ來い、顏を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階座敷へ結城を連上げて、今夜も頭痛がするので御酒の相手は出來ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に醉ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んで其後

は知らず、今は御免なさりませと斷りを言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店ものゝ白瓜が何んな事を仕出しましやう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、來るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、醉ふたらば介抱して下されといふに、君が醉つたを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むはいゝが、又頭痛がはじまりはせぬか、何が其樣なに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つてはわるい事かと問はれるに、いゑ貴君には聞て頂きたいのでござんす、醉ふと申しますから驚いてはいけませぬと嫣然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかさりき。

常には左のみに心も留まらさりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髮の毛を短く刈あげて衿足のくつきりとせしなど今更のやうに眺められ、何をうつとり

して居ると問はれて、貴君のお顏を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おゝ恐いお方と笑つて居るに、串戲はのけ、今夜は樣子が尋常でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかと問ふ、何しに降つて湧いた事もなければ、人との紛紜などはよし有つたにしろそれは常の事、氣にもかゝらねば何しに物を思ひましやう、私の時より氣まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心がらの淺ましい譯がござんす、私は此樣な賤しい身の上、貴君は立派なお方樣、思ふ事は反對にお聞きになつても汲んで下さるか下さらぬか其處ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は殘らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑むことさかんなり。

何より先に私が身の自墮落を承知して居て下され、もとより箱入りの生娘ならねば少しは察しても居て下さらうが、口奇麗な事はいひますとも此あたりの人に泥の中の蓮とやら、惡業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に來る人もあるまじ、貴君は別物、私が處へ來る人とて大抵はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるに寧九尺

二間でも極まつた良人といふに添ふて身を固めやうと考へる事もござんすけれど、それが私は出來ませぬ、それかと言つて來るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、いとしいの、見初ましたのと出たらめのお世辭をも言はねばならず、數の中には眞にうけて此樣なやくざを女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添ふたら本望か、それが私は分りませぬ、そも〳〵の最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奧樣にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは厭なり他處ながらは慕はしゝ、一口に言はれたら浮氣者でござんしやう、あゝ此樣な浮氣者には誰がしたと思召す、三代傳はつての出來そこね、親父が一生もかなしい事でござんしたとてほろりとするに、其親父さんはと問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかに斷食して死んだそうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知

る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居りました、私の父といふは三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも厭とて居職に飾の金物をこしらへましたれど、氣位たかくて人愛のなければ贔屓にしてくれる人もなく、あゝ私が覺えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古浴衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物に工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に去る物を買ひに行けよといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手に握つて米屋の門までは嬉しく驅着けたれど、歸りには寒さの身にしみて手も足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく轉ける機會に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりさら／＼と飜れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど此れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の樣子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげて家には歸られず、立てしばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて與れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近所に川なり池なりあらうなら私は定めし身を投げて

仕舞ひましたろ、話は實の百分一、私は其頃から氣が狂つたのでござんす、歸りの遲きを母の親案じて尋ねに來てくれたをば時機に家へは戻つたれど、母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る者もなく、家の内森として折々溜息の聲のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日斷食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

言ひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅の手巾顏に押當て其端を喰ひしめつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄來る蚊のうなり聲のみ高く聞えぬ。

顏をあげし時は頰に涙の痕は見ゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私は其樣な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜も此樣な分らぬ事いひ出して嘸貴君御迷惑で御座んしてしよ、もう話しはやめまする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽氣にしましやうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はあ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましてから一週忌の來ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未

だ五十、親なれば褒めるので無けれど細工は誠に名人と言ふても宜い人でござんした、なれども名人だとて上手だとて私等が家のやうに生れついたは何もなる事は出來ないので御坐んしやう、我身の上にも知れまするとて物思はしき風情、お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑッと驚きし様子に見えしが、私等が身にて望んだ處が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ〳〵とあるに、あれ其やうなけしかけた詞はよして下され、何うで此様な身でござんするにと打しをれて復もの言はず。

今宵もいたく更けぬ、下座敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力は何うでも泊らすといふ、いつしか下駄をも隠させたれば、足を取られて幽靈ならぬ身の戸のすき間より出づる事もなるまじとて今宵は此處に泊る事となりぬ、雨戸を鎖す音一しきり賑はしく、後には透もる燈火のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡査の靴音のみ高かりき。

七

思ひ出したとて今更に何うなるものぞ、忘れて仕舞へ諦めて仕舞へと思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一緒に藏前へ參詣したる事なんど思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事に出る張もなく、お前さんそれではならぬぞえと諫め立てる女房の詞も耳うるさく、エヽ何も言ふな默つて居ろとて横になるを、默つて居ては此日が過されませぬ、身體がわるくば藥も呑むがよし、御醫者にかゝるも仕方がなけれど、お前の病ひはそれではなしに氣さへ持直せば何處に惡い處があらう、少しは正氣になつて精出して下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出來て氣の藥にはならぬ、酒でも買て來てくれ氣まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さん其お酒が買へるほどなら嫌とお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは賴みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親子三人口おも湯も滿足には呑まれぬ中で酒を買へとはよく〳〵お前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへ

ても喰べさせず、お精靈さまのお棚かざりも拵へられねば御燈明一つで御先祖樣へお詫びを申して居るも誰れが仕業だとお思ひなさる、お前が阿房を盡してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては惡けれどお前は親不孝子不孝、少しは彼の子の行末をも思ふて眞人間になつて下され、御酒を呑んで氣を晴らすは一時、眞から改心して下さらねば心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる心根のつらさ、其身になつてもお力の事が忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲けし我れに心かぎりの苦勞をさせて、子には襤褸を下げさせ家とては六疊一間の此樣な犬小屋、世間一體から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が來ればとて、隣近所に牡丹もち團子と配り歩く中を源七が家へは遣らぬがよい、返禮が氣の毒なとて、親切かは知らねど十軒長屋の一軒は除け物、男は外出がちなればいさゝか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうな情なき思ひもするを、それをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつゞけ、無情き人の心の底がそれほどまでに戀しいか、晝も夢に見て獨

言ふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはてゝお力一人に命をも遣る心か、あさましい口惜しい辛い人と思ふに中々言葉は出でずして恨みの露を眼の中にふくみぬ。

物いはねば狹き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたど〳〵しきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそ〳〵と歸り來る太吉の姿、何やらん大袋を兩手に抱へて母さん母さんこれを貰つて來たと莞爾として駈け込むに、見れば新開の日の出屋がかすていら、おや此樣な良いお菓子を誰れに貰つて來た、よくお禮を言つたかと問へば、あゝ能くお辭儀をして貰つて來た、これは菊の井の鬼姉さんが呉れたのと言ふ、母は顏色かへて圖太い奴めが是れほどの淵に投げ込んで未だいぢめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かしによこし居る、何といふてよこしたと言へば、表通りの賑やかな處に遊んで居たらば何處のか伯父さんと一緒に來て、菓子を買つてやるから此方へお出といつて、おいらは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つて呉れた、喰べては惡いかえと流石に母の心を測りかね、顏をのぞ

いて猜疑するに、あゝ年がゆかぬとて何たら譯の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを懶惰者にした鬼ではないか、お前の衣服のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ惡魔にお菓子を貰つて喰べてもいゝかと聞くだけが情ない、汚い穢い此樣な菓子、家へ置くのも腹が立つ、捨てゝ仕舞な、捨てお仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて轉び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初と一聲大きくいふに何か御用かと、尻目にかけて振むかうともせぬ横顏を睨んで、いゝ加減に人を馬鹿にしろ、默つて居ればいゝ事にして惡口雜言は何の事だ、知つた人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が惡い、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけにおれへの當こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女房氣質を誰れが敎へた、お力が鬼なら手前は魔王、商賣人のだましは知つて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆ

け、面白くもない女郎めと叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に當つけやう、この子があんまり分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とッこに取つて出てゆけとまでは酷う御座んす、家の爲をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此樣な貧乏世帶の苦勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帶に飽きが來たなら勝手に何處なり行つて貰はう、お前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の伸ばされぬ事はなし、明けても暮れてもおれが棚おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭になつた、貴樣が出ずば何ら道同じ事惜しくもない九尺二間、おれが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴樣が行くか、おれが出やうかと激しく言はれて、お前はそんなら眞實に私を離縁する心かえ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほどこみ上ぐる涙を呑込んで、これは私が惡う御座んした、堪忍して下され、お力が親切で志して呉れたものを捨てゝ仕舞つたは重々惡う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で

御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませず、陰の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ來た者なれば、離縁されての行き處とてはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎くからうと此子に免じて置いて下され、あやまりますと手を突いて泣けども、イヤ何うしても置かれぬとて其後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなるものか、女房が歎きは更なり、遂には可愛き子をも餓ゑ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何方が好い、言ふて見ろと言はれて、おいらはお父さんは嫌ひ、何にも買つて呉れないものと眞正直をいふに、そんなら母さんの行く處へ何處へも一緒に行く氣かえ、あゝ行くともとて何とも思はぬ樣子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私

が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何處へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしろとて寐轉びしまゝ振向かんともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいまゝの道樂なり何なりお盡しなされ、最ういくら此子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探つて何やらの小風呂敷取出し、これは此子の寐間着の袷、はらがけと三尺だけ貰つて行まする、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、よく考へて見て下され、たとひ何のやうな貧苦の中でも二親揃つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れゝば片親、何につけてもふびんなは此子とお思ひなさらぬか、あゝ腸が腐つた人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申しますと風呂敷さげて表へ出づれば、早くゆけ〳〵とて呼かへしては呉れざりし。

八

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出でし棺二つあり、一つは駕にて一つはさし擔ぎにて、駕は菊の井の隠居所よりしのびやかに出でぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見込まれて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろといふものもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の歸りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、えらさうに見えたといふ、何にしろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては殘念であらうと人の憂ひを串戯に思ふものもあり、諸說みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べる

を見し者ありと傳へぬ。

うつせみ

一

家の間數は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狹なれども北南吹とほしの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、場處も小石川の植物園にちかく物靜なれば、少しの不便を疵にして他には申す旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしになりけれど、いまだに住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇麗にて見とみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて來るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五

十錢といふに、それは下町の相場とて折かへして來るはなかりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そゝくさと落つき無きが差配のもとに來りて此家の見たしといふ、案內して其處此處と戶棚の數などを見せてあるくに、其等のことは片耳にも入れで、唯四邊の靜とさはやかなるを喜び、今日より直にお借り申しまする、敷金は唯今置いて參りまして、引越しは此夕暮、いかにも急速では御座りますが直樣掃除にかゝりたう御座りますとて、何の仔細なく約束はとゝのひぬ。お職業はと問へば、いゑ別段これといふ物も御座りませぬとて至極曖昧の答へなり、御人數はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人にもなりますし、始終ごたごたして埓は御座りませぬといふ、妙な事のと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來りしは、合乘りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を眞直に入りて玄關におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乘り居たる二十許の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顏にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白

きがいたましく見えて、折柄世話やきに來て居たりし差配が心に、此人を先刻のそゝくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは　大八に唯一くるま來りしばかり、兩隣にお定めの土産は配りけれども、家の内は引越らしき騷ぎもなく至極寂寞とせしものなり。人數は彼のそゝくさに此女中と、他には御飯たきらしき肥大女および、其夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど來りし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髮の老人、一人は妻なるべし　對するほどの年輩にてこれは實法に小さき丸髷をぞ結ひける、病みたる人は來るよりやがて奧深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄然とせし老人二人の面やう、何處やら令孃に似た處のあるやうなるは、此娘の若しも父母にてはなきか、彼のそゝくさ男を始めとして女中ども一同旦那樣御新造樣と言へば、態々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すゞしきほどに今一人車に乗りつけゝる人のありけり、紬の單衣に白ちりめんの帶を卷きて、鼻の下に薄ら髯のある三十位のでつぷりと肥りて見だ

てよき人、小さき紙に川村太吉と書て貼りたるを讀みて此處だ〳〵と車より下りける、姿を見つけて、お〻番町の旦那樣とお三どんが眞先に襷をはづせば、そ〻くさは飛出していやお早いお出、よく早速おわかりになりましたな、昨日まで大塚にお置き申したので御座りますが何分もう、その何だか頻りに嫌におなりなされて何處へか行から行からと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處をば見つけ出しまして御座ります、御覽下さりませ一寸斯うお庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分の爲にもよからうかと存じまする、はい昨夜はよくお眠になりましたが今朝ほど又少しその、一寸御樣子が變つたやうで、ま、いらしつて御覽下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく首をひねりて、一奧の座敷に通りぬ。

二

氣分すぐれてよき時は三歲兒のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切て姉樣のお製に餘念なく、物を問へばにこ〳〵と打笑みて唯はい〳〵と意味もなき返事を

する温順しさも、狂風一陣梢をうごかして來る氣の立つた折には、父樣も母樣も兄樣も誰れも後生、顏を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、聲は腸を絞り出すやうにて私が惡う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し〳〵、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行まする、今行まする、私もお跡から參りまするとて日のうちには看護の隙をうかゞひて驅け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とては鋏一挺目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、此纎弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乘りて驅け出す時には大の男二人がゝりにてもむつかしき時のありける。

本宅は三番町の何處やらにて表札を見ればむゝ彼の人の家かと合點のゆくほどの身分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者も心安きを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住へば見る物殘らず嫌になりて、次第に病ひの募ること見る目も恐ろしきほど凄まじき事あり。

當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやる

ぺし、病ひにふしたるは櫻さく春の頃よりと聞くに、それより晝夜瞼を合する間もなき心配に疲れて、老たる人はよろ〳〵たよ〳〵と二人ながら力なさゝうの風情、娘が病ひの僅かに起りて私はもう歸りませぬとて驅け出すを見る折にも、あれあれ何うかして呉れ、太吉々々と呼立るほかには何の能なく情なき躰なり。

昨夜は夜もすがら靜かに眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顏を洗ひ髮を撫でつけて着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帶に緋ちりめんの帶あげも人手を借りずに手ばしこく締めたる姿、不圖見たる目には此樣の病人とも思ひ寄るまじき美くしさ、兩親は見返りて今更に涙ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持來りて召上りますかと問へば、いや〳〵と頭をふりて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出來るで御座んしやうかとて問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る料簡、此處がお前さんの家ではないか、此ほかに行くところも無からうではないか、分らぬ事を言ふものではありませぬと叱られて、それでも母樣私は何處へか行くので御座りましやう、あれ彼處に迎ひの車が來て居まする、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大い

なる蜘蛛の巣のかゝりて、朝日にかゞやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り來て、あれあんな事を、貴君お聞遊ばしましたかと良人に向ひて忌はしげにいひける、娘は假に蒼ざめかへりし面に生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年のお花見の時ね、と言ひ出す、何えと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねえとて面白さうに笑ふ、あの時貴君が下さつた花をね、私は今も本の間へ入れてありまする、奇麗な花でしたけれどもゝう萎れて仕舞ま來した、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬか、何故逆ひに來て下さらないの、何故歸つて來て下さら、ぬのもうお目にかゝる事は一生出ぬので御座ん貴するか、それは私が惡う御座りました、私が惡いに相違ござんせぬけれど、それは兄樣が、兄が、あゝ誰れにも濟みませぬ、私が惡う御座りました免して免してと胸を抱いて苦しさうに身を悶ゆれば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學校も花もありはしない、兄樣も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病氣なのだから氣を落つけて舊の雪子さんに成てつお呉れ、よ、よ、氣が附きましたかえと脊を撫でられ

て母の膝の上にすゝり泣きの聲ひくゝ聞えぬ。

三

番町の旦那樣お出と聞くより雪や兄樣がお見舞に來て下されたと言へど、顏を横にして振向うともせぬ無禮を、常ならば怒りもすべき事なれど、あゝ、捨てゝ置いて下さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母が手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に默然として居る父に向ひ、靜に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少き人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたくと團扇づかひするか、卷煙草の灰を拂つては又火をつけて手に持てゐる位なもの、絕えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、あゝ此樣な事と知りましたら早くに方法も有つたのでしやうが今に成つては駟馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何とも、私は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無

い事に成つてな、第一は此娘の氣が狭いからではあるが、爺様村も氣が狭いから
で、どうも此樣な事になつて仕舞つたで、私共二人が實に其方に合せる顔も無い
やうな仕儀でな、然し爺婆をも可愛想と思つて遣つて異れ、此樣な身に成つても其
方への義理ばかり思つて情ない事を言ひ出し居る、多少教育も授けてあるに狂氣
するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行く\と家の恥辱にもなる實に憎む
べき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほどまで操といふものを取止めて置い
ただけ憐んで遣つて異れ、愚鈍ではあらうが子供の時から是れといふ不出來しも無
かつたを思ふと何か殘念のやうにもあつて、頭の親馬鹿といふのであらうが平癒
らぬほどなら死ねとまでも諦めがつきかねるもので、餘り昨今煩はしい事を言は
れると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに來る
ものが有るなどゝ囈言をやるにつけて腹が詰らぬ易者などにでも見て貰つたか、
愚な話しではあるが一月のうちに生命が危いとか言つたさうな、聞いて見ると餘
り快くもないに當人も頻りと嫌がる樣子なり、ま、引移りをするが宜からうと
て此處を捜させては來たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎日

死ぬ死ぬと言て見る通り人間らしき色艶もなし、食事も丁度一週間ばかり一粒も口へ入れる事が無いに、そればかりでも身躰の疲労が甚しからうと思はれるので種々に異見も言ふが、何うも病の故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用ひぬに困りはてる、醫者は例の安田が來るので斯う素人まかせでは我まゝばかり募つて宜くあるまいと思はれる、私の病院に入れる事は不承知かと度々聞かれるのであるが、それも何うであらうかと母などは頻にいやがるので私も二の足を踏んで居る、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをするからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論番はして居るが往來へ飛出されても難儀が極なり、大學を思ふと入院させやうとも思ふが何かふびんらしくて心一つには定めかねるて、其方に思ひ附もあらば言つて見て呉れとてくる／＼と剃たる頭を撫でゝ思案に能はぬ風情、はお／＼と聞居る人は詞は無くて諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身を揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、たよ／＼と母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の蒲團の上

へ抱き上げて臥さするにはや正躰も無く夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、黑く多き髮の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのこはれたるやうに折返し折返し髷形に疊みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども、幽靈のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて、締めたる緋ちりめんの帶あげの解けて帶より落かゝるも艶かしからで傷ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し學校のまねびをなせば、心にまかせて紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと憐なきやうなる中に、鮮かに讀まれたる村といふ字、郞といふ字、あゝ植村銖郞、植村銖郞、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

今日は用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子のつ

を冷す附添の女子に代りて、どれ少し私がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いゝさ先させて見てくれとて氷嚢の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄樣が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心附けれども何の事とも聞分ぬと覺しく、眼を見開きながら空を眺めて、あれ奇麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄樣兄樣と聲を限りに呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、よ、お前が此樣な病氣になつてから、お父樣もお母樣も一晩もゆるりとお眠になつた事はない、お疲れなされてお痩せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく解る人ではないか、氣を靜めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に弔つて遣れば、お前が手づから香花でも手向れば、彼れは快く瞑することが出來ると遺書にもあつたと言ふではないか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お

前の事も併せて思ひ切つたので決して未練は殘して居なかつたに、お前が此樣に本心を取亂して御兩親に歎をかけると言ふは解らぬではないか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼れは決して怨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左樣であらう、校內一の人だとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其樣な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既にそれは人も知つて居る事なり遺書によつて明かではないか、据へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を經るが宜い、御兩親のある事を忘れないで、御兩親がどれほどお歎きなさるかを考へて、氣を取直して吳れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて吳れ、よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。

女子どもは何時しか枕元をはづして四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えねども兄樣兄樣と小き聲に呼べば、何か用かと氷

懐片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も気の立つまゝに駈出して大の男に捉へられるを、振放すとて恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛いが知れるほどならばと果敢なき事をも両親の頼もしがりぬ。

おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の問へば、言下に兄様で御座りましやうと言ふ、左様わかればもう仔細は無し、今話して下された事覚えてかしらぬ、ほゝ、知つて居ます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顔を見合せて情なき思ひなり。

良しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、もう後生お願ひで御座りますから、其事は言ふて下さりますな、其やうに仰せ下さりましても私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出づるに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊ばすのと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突きのけつゝ縁の方へと駈け出すに、それとて一同ばらばらと勝手よりは大吉おくらなど飛來るほどにさのみも行かず縁先の柱のもとにばつたりと坐して、[illegible]然し

て下され、私がわるう御座りました、始めから私が惡う御座りました、貴君に惡い事は無い、私が、私が、申さないが惡う御座りました、兄と言ふては居りまするけれど。むせび泣きの聲きこえ初めて斷續の言葉その事とも聞わき難く、中かかげし軒ばの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も昨一日も、三月の以前も、其前もさらに異る事をば言はざりき、唇に絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殼になりたれば、人の言へるは聞分くるよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔を夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣る方なかりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ。お倉も言へり、心なきお三どんの末まで孃さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品

のよき高髷にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊ばして學校がよひのお姿今も目に殘りて、何時舊のやうに御平癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色の黑い無骨らしきお方、學問はえらからうとも何うで此方のお孃さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬから其樣な憎ていな事も言へるもの〻三日交際をしたら植村樣のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を惡いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村樣が何だと聞いた時にはお可愛想な事をと淚がこぼれたもの、お孃さまの身になつては辛からうではないか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つ〻しんでお出遊ばすだけ身にしみる。事も深からう、あの親切な優しい方を斯う言ふては惡いけれど若旦那さへ無かつたらお孃さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左樣いへば植村樣が無かつたら天下泰平に治まつたものを、あ〻浮世はつらいものだね、何事も明すけに言ふて退ける事が出來ぬからとて、お倉はつく〴〵ま〻ならぬを痛みぬ。つと

めある身なれば正雄は日曜に訪ふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な〳〵車を柳のもとに乘りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚兒のやうになりて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰が給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすゝる事もあり、癒つて呉れるか。癒りまする。今日癒つて呉れ。今日癒りまする、癒つて兄樣のお袴を仕立て上げまする、お召も縫ふて上げまする、それは嬉し早く癒つて縫ふて呉れと言へば、左樣しましたらば植村樣を呼んで下さるか、植村樣に逢はして下さるか、むゝ逢はして遣る、呼んでも來る、はやく癒つて御兩親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りますると憚りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ來るに、容躰とかく〳〵變りて何を言へどもいや〳〵とて人の顏をば見るを厭ひ、父母をも兄をも女子どもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何にも知りませぬとて打泣くばかり、家の中をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼらせぬ。

俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ落入たる眼に形相すさまじく此世の人とも覺えずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てゝ姿を見るばかり、霧の立おほふて朧氣なれども明日は明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正氣に復りて夢のさめたる如く、父樣母樣といふ折のありもやすると覺束なくも一日二日と待たれぬ、空蟬はからを見つゝもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞えずもかな。

十三夜

上

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと両親に出迎はれつるものを、今宵は辻より飛のりの車さへ歸して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの高聲、いはゞ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の慾さへ渇かねば此上に望みもなし、やれ／＼有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、あゝ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばすものを、何の顔さげて離縁状もらふて下されと言はれたものか、叱られるは必定、太郎といふ子もある身にて置い

て驅け出して來るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして、是れまでの喜びを水の泡にさせまする事つらや、寧そ話さずに戻らうか、戻れば太郎の母と言はれて何時何時までも原田の奥様、御兩親に奏任の聟がある身と自慢させ、私さへ身を節約れば時たまはお口に合ふ者お小遣ひも差あげらるに、思ふまゝを通して離緣とならば太郎には繼母の憂き目を見せ、御兩親には今までの自慢の鼻俄かに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、あゝ此身一つの心から出世の眞も止めずばならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人のもとへ、えゝ厭々と身をふるはす途端、よろ/\として思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の聲、道ゆく惡太郎の惡戯とまがへてなるべし。

外なるはおほゝと笑ふて、お父樣私で御座んすといかにも可愛き聲、や、誰れだ、誰れであつたと障子を引明て、ほうお關か、何だな其樣な處に立つて居て、何うして又此おそくに出かけて來た、車もなし、女中も連れずか、やれ/\ま早く中へ這入れ、さあ這入れ、何うも不意に驚かされたやうでまご/\するわな、

格子は閉めずとも宜い私が閉める、兎も角も奥がいゝ、ずつとお月樣のさす方へ、さ、蒲團へ乘れ、蒲團へ、何うも疊が汚いので大屋に言つては置いたが職人の都合があると言ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷いて呉れ、やれ〳〵何うして此遲くに出て來たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやさるれば、針の席にのるやうにて奧さま扱ひ情なくじつと涙を呑込んで、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君もお母樣も御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いやもう私は嚔一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道といふ奴を始めるがの、それも蒲團かぶつて半日も居ればけろ〳〵とする病だから仔細はなしさと元氣よく呵々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晩は何方へか參りましたか、あの子も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親はほた〳〵として茶を侑めながら、亥之は今しがた夜學に出て行ました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長樣が可愛がつて下さるので何の位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁が有るからとて宅では毎日いひ暮して居ます、お前に如才は有るまいけれど此後とも原田

さんの御機嫌の好いやうに、亥之はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出來まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申して置いてお呉れ、ほんに替り目で陽氣が惡いけれど太郎さんは何時もお惡戲をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でゞない、お祖父さんも戀しがつてお出なされたものをと言はれて、又今更にうら悲しく、連れて來やうと思ひましたけれどあの子は宵まどひでもう疾うに寐ましたから其まゝ置いて參りました、本當に惡戲ばかりつのりまして聞わけとては少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍ばつかり覗ふて、ほんに／＼手が懸つて成ませぬ、何故彼樣で御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては來たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、お煎餅やおこしの賺しも肯かで、皆々手を引いて鬼に喰はすと威かしてゞも居やう、あゝ可愛さうな事をと聲たてゝも泣きたきを、さしも兩親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こん／＼として涙を襦袢の袖にかくしぬ。

今宵は舊暦の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子をこしらへてお月樣にお供へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたけれど、亥之助も何か極りを惡がつて其樣な物はお止しなされと言ふし、十五夜にあげなんだから片月見になつても惡し、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上げる事が出來なんだに、今夜來て呉れるとは夢のやうな、ほんに心が屆いたのであらう、自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど親のこしらへたは又別物、奥樣氣を取すてゝ今夜は昔のお關になつて、外見を構はず豆なり栗なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父樣と噂すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位のいゝ方々や御身分のある奥樣がたとの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上に立つものはそれ丈に苦勞が多く、里方が此樣な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、それを種々に思ふて見ると父さんだとて私だとて孫なり子なりの顏の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る

る事はありとも木綿着物に毛繻子の洋傘さした時には見す〳〵お二階の簾を見ながら、あゝお關は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞まする、實家でも少し何とか成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやうものを、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにもお重箱からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴の一つかみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひまする、それは成程柔かい衣服きて手車に乘りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出來ず、いはゞ自分の皮一重、寧そ賃仕事してもお傍で暮した方がよつぽど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其樣な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の貢をするなどゝ思ひも寄らぬ事、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇さんの氣に入るやうにして家の内を納めてさへ行けば何の仔細は無い、骨が折れるからとてそれ丈の運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈、女などゝいふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を

言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出來ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調製たものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の戯譜を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴しぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩きして來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほどきらびやかならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も附かざりしが、聟よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、とりやもう程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねばなるまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父樣私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御聞遊ばしてと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一しづく幾層の憂きを洩らしそめぬ。

父は穏かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、私は今宵限り、

原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許して參つたのではなく、あの子を寐かして、太郎を寐かしつけて、もうあの顏を見ぬ決心で出て參りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承知せぬほどの彼の子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て參りました、お父樣、御母樣、察して下さりませ私は今日までつひに原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣き盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞお願ひで御座ります離縁の狀を取つて下され、私はこれから內職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人で置いて下さりませとわつと聲たてるを嚙しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出づると憐れなり。

それは何ういふ仔細でと父も母も詰寄つて問かゝるに今までは默つて居ましたれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大抵お解りに成ませう、物言ふは用事のある時慳貪に申附けられるばかり、朝起まして機嫌をきけば不圖脇を向

いて庭の草花を態とらしき褒め詞、是れにも腹はたてども良人の遊ばす事なれば
と我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から
小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それ
はまだ〳〵辛防もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御
蔑みなさる、それは素より華族女學校の椅子にかゝつて育つた者ではないに相
違なく、御同僚の奥様がたのやうにお花のお茶の、歌の畫のと習ひ立てた事もな
ければ其お話しのお相手は出來ませぬけれど、出來ずば人知れず習はせて下さつ
ても濟むべき筈、何も表向き實家の惡るいを吹聽なされて、召使ひの婢女どもに顏
の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの
間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出來てからと
いふものは丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります、私はくら
闇の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめ
の中は何か串戲に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは
私に御厭きなされたので此樣もしたら出てゆくか、彼樣もしたら離縁をと言ひ出

すかと苛めて苛めて苛め抜くので御座りましよ、御父樣も御母樣も私の性分は御存じ、よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍ひ者してお置きなさらうとも其樣な事に悋氣する私でもなく、婢女どもから其樣な噂も聞えまするけれどあれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位は　ありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とては一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の内の樂しくないは妻が仕方の惡いからだと仰しやる、それも何ういふ事が惡い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあの御方は鬼で御座りまする、御自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私が此樣な意氣地なしで太郎の可愛さに氣が引かれ、何うでもお詞に違背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない愚うたらの奴、それからして氣に入らぬと仰しやりまする、左樣かと言つて少しなりとも私の言條を立てゝ負けぬ氣にお返事をしましたらそれを取つこに出て行

けと言はれるは必定、私は御母様出て來るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとてゆめさら殘りをしいとは思ひませぬけれど、何にも知らぬ彼の太郎が、片親に成るかと思ひまするど意地もなく我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛防して居りました、御父樣、御母樣、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を語れば兩親は顏を見合せて、さては其樣の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く每々に身にしみて口惜しく、父樣は何と思召すか知らぬが元々此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が惡いの學校か何うしたのとよくも〱勝手な事が言はれたもの、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覺えて居る、阿關が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた、もとの猿樂町の彼の家の前で、お隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとて、それをば阿關が貰ひに行きしに其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやい〱と貰ひ

たがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んでは置ませず、支度とても只今の有様で御座いますからとて幾度斷つたか知れはせぬけれど、何も舅姑のやかましいが有るではなし、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも十分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからとそれは〳〵火のつくやうに催促して、此方から強請た譯ではなけれど支度まで先方で調へて謂はゞお前は戀女房、私や父樣が遠慮してさのみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてゞはない、これが妾手かけに出したのではなし 正當にも正當にも百まんだら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、お前の緣にすがつて聟の助力を受けもするかと他人樣の所思が口惜しく、痩せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盡して、平生は逢ひたい娘の顏を見ずに居ますする、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出來るの出來ぬのとよく其様な口が利けたもの、默つて居ては際

限もなく募つてそれは〳〵頑に成つて仕舞ひます、第一は婢女どもの手前奥様の威光が殺げて、末にはお前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母様を馬鹿にする氣になられたら何とします、言ふだけの事は屹度言ふて、それが惡いと小言をいふたら何の私にも家がありますとて出て來るが宜からうではないか、ほんに馬鹿々々しいとつては夫れほどの事を今日が日まで默つて居るといふ事がありますものか、あんまりお前が温順し過ぎるから我儘がつのられたのであろ、聞いたばかりでも腹が立つ、もう〳〵怯けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあれば其樣な火の中にじつとして居るには及ばぬこと、なあ父樣一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛つて前後もかへり見ず。

　父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢてありけるが、あゝお袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我さへ初めて聞いて何うしたものかと思案にくれる、阿關の事なれば並大抵で此樣な事を言ひ出しさうにもなく、よく〳〵つらさに出て來たと見えるが、して今夜は聟どのは不在か、何か改まつての事件でもあつてか、いよ〳〵

離縁するとでも言はれて來たのかと落ついて問ふに、良人は一昨日より家へとては歸られませぬ、五日六日と家を明けるは常の事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際に召物の揃へかたが惡いとて如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、あゝ、私位不仕合の人間はあるまい、お前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊ばしました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、たま〳〵言はるれば此様な情ない詞をかけられて、それでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顏おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛防がわかりませぬ、もう〳〵もう私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔と思へばそれまで、あの頑是ない太郎の寢顏を眺めながら置いて來るほどの心になりましたからは、もう何うでも勇の傍に居る事は出來ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私のやうな不運の母の手に育つより繼母御なり御手かけなり様に適ふた人に育てゝ貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々あの子の爲にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても歸る事は致しませぬとて、斷つても斷てぬ子の可愛さに、奇麗に言へども詞は

ふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居辛くもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿關の顏を眺めしが、大丸髷に金輪の根を卷きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか調ふ奥樣風、これをば結び髮に結ひかへさせて、縞銘仙の半纏に襷かけの水仕業さする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一旦の怒りに百年の運を取はづして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻らば、泣くとも笑ふとも再び原田太郎が母とは呼ばるることゝ成るべきにあらず、良人に未練は殘さずとも我が子の愛の斷ちがたくば離れていよいよ物をも思ふべく、今の苦勞を戀しがる心も出づべし、斯く容よく生れたる身の不幸、不相應の縁につながれて幾らの苦勞をさする事と憐れさの増れども、いや阿關斯う言ふと父が無慈悲で汲取つて呉れぬのと思ふか知らぬが決してお前を叱るではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は眞から盡くす氣でも取りやうに由つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利發の人ではあり隨分學者でもある、無茶苦茶にいぢ

め立てる譯ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家などゝ言はれるは極めて恐ろしい我まゝ者、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ歸つて當りちらされる、的に成つては隨分つらい事もあらう、なれどもあれほどの良人を持つ身のつとめ、區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れるのとは格が違ふ、隨つてやかましくもあらうむづかしくもあらうそれを機嫌の好いやうにとゝのへて行くが妻の役、表面には見えねど世間の奥樣といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤めなり、殊にはこれほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へど亥之が昨今の月給に有ついたも畢竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光もしてよそながらの恩を着ぬとは言はれぬに辛からうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛防がなるほどならば、これから後とて出來ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、一度縁が切れては二度と顏見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、な

あ關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に斂めて知らぬ顏に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんとても親も察しる弟も察しる、涙は各自に分けて泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿關はわつと泣いてそれでは離縁をといふたも我儘で御座りました、成程太郎に別れて顏も見られぬやうにならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなるもので御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゝず、兎もあれ彼の子も兩親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで嫌な事をお聞かせ申しました、今宵限り關はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく當る位百年も辛防出來さうな事、よく御言葉も合點が行きました、もう此樣な事は御聞かせ申しませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は聲たてゝ何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しくて、うしろの土手の自然生を弟の亥之が折て來て、瓶にさしたる薄の穗の招く手振りもあはれなる夜なり。

實家は上野の新坂下、駿河臺への路なれば茂れる森の木の下闇わびしけれど、今宵は月もさやかなり、廣小路へ出づれば晝も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで、合點が行つたら兎も角も歸れ、主人の留守に斷りなしの外出、これを咎められるとも申譯の詞は有るまじ、少し時刻は遲れたれど車ならばつひ一飛、話しは重ねて聞きに行かう、先づ今夜は歸つて呉れとて手を取つて引出すやうなるも事あら立てじの親の慈悲、阿關はこれまでの身と覺悟してお父様、お母様、今夜の事はこれ限り、歸りまするからは私は原田の妻なり、良人を誹るは濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不料簡など出すやうな事はしませぬほどにそれも案じて下さりますな、私の身體は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何となりして貰ひましよ、それではもう私は戻ります、亥之さんが歸つたならば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて參りまするとて是非なさゝうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿

何處まで幾干でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お孃樣これは私がやりまする、難有う御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くゞれば顏に袖、涙をかくして乘り移る憐れさ、家には父が咳拂ひの是れもうるめる聲たりし。

下

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえ〴〵に物がなしき上野へ入りてよりまだ一町もやう〳〵と思ふに、いかにしたるか車夫はぴつたりと轅を止めて、誠に申かねましたが私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬからお下りなすつてと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば阿關は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり增しは上げやうほどに骨を折つてお呉れ、こんな淋しい處では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふもの、ぐず〳〵に行つてお呉れと少しふるへて賴むやうに言へば、增しが欲しいといふのではありませぬ、私からお願ひです何うぞお下りなすつて、もう引くのが厭になつたので御座りますと言ふに、それではお前

加減でも惡いか、まあ何うしたといふ譯、此處まで挽いて來て厭になつたでは濟むまいがねと聲に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もう何うでも厭になつたのですからとて提燈を持しまゝ不圖脇へのがれて、お前は我まゝの車夫さんだね、それならば約定の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つて呉ればそれでよし、代はやるほどに何處か其邊まで、せめて廣小路までは行つてお呉れと優しい聲にすかすやうにいへば、成るほど若いお方ではあり此淋しい處へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が惡う御座りました、ではお乘せ申しませう、お供を致しませう、嘸お驚きなさりましたらうとて惡漢らしくもなく提燈を持かふるに、お關もはじめて胸をなで、心丈夫に車夫の顏を見れば二十五六の色黑く、小男の痩せぎす、あ、月に背けたあの顏が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽元まで轉がりながら、もしやお前さんはと我知らず聲をかけるに、え、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんはあのお方ではないか、私をよもやお忘れはなさるまいと車より滑るやうに下りてつく〳〵と打まもれば、貴孃は齋藤の阿關さん、面目も無い此樣な姿で、背後に目が無ければ何の

氣もつかずに居ました、それでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の先より爪先まで眺めていゑ〳〵私だとて往來で行逢ふ位ではよもや貴君と氣は附きますまい、唯た今の先まで知らぬ他人の車夫さんとのみ思ふて居ましたに御存じないのは當然、勿體ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時から此樣な業して、よく其孱弱い身に障りもしませぬか、伯母さんが田舍へ引取られてお出なされて、小川町のお店をお廢めなされたといふ噂は他處ながら聞いて居ましたれど、私も昔の身でなければ種々と障る事があつてね、お尋ね申すは更なること手紙あげる事も成りませんかつた、今は何處に家を持つて、お内儀さんも御健勝か、小兒のも出來てか、今も私は折ふし小川町の 勸工場見に行まする度毎、舊のお店がそつくり其儘同じ烟草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通つても覗かれて、あゝ高坂の錄さんが子供であつたころ、學校の往復りに寄つて卷烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしう吸立てたものなれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此樣なむづかしい世に何のやうの世渡りをしてお出なさらうか、それも心に懸

りまして、實家へ行く度に御樣子を、もし知つて居るかと聞いては見まするけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根つからお便りを聞く緣がなく、何んなになつかしう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家といふものも御座りませぬ、寢處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向いた時は今夜のやうに遲くまで挽く事もありまするし、厭と思へば日がな一日ごろ〳〵として烟のやうに暮して居まする、貴孃は相變らずの美くしさ、奥樣にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拜む事が出來るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出來るかと夢のやうに願ふて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取りあつかふて居ましたけれど命があればこその御對面、あゝ能く私を高坂の錄之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと下を向くに、阿關はさめざめとして誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな。

してお内儀さんはと阿關の問へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白いとか恰好が何うだとか言ふて世間の人は　暗雲に褒めたてた女で御座り

ます、私が如何にも放蕩をつくして家へとては寄りつかぬやうに成つたを貰ふべき頃に貰はぬからだと親類の中のわからずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に勸めたてる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成れと彼れを家へ迎へたは丁度貴孃が御懐姙だと聞ました時分の事、一年目には私が處にもお目出たうを他人からは言はれて、犬張子や風車を並べたてるやうに成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとひ小町と西施と手を引いて來て、衣通姫が舞を舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出來ませう、遊んで遊んで遊び拔いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舍へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮窒扶斯に罹つて死んださうに聞ました、女はませた者ではあり、死ぬ際には定め

し父樣とか何とか言ふたので御座りませう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顏に笑みを浮べて貫孃といふ事も知りませぬので、飛んだ我ままの不調法、さ、お乘りなされ、お供しまする、嘸不意でお驚きなさりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が樂しみに轅棒をにぎつて、何が望みに牛馬の眞似をする、錢が貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭で、お客樣を乘せやうが空車の時だらうが厭となると用捨なく厭に成まする、呆れはてたる我まゝ男、愛想が盡きるでは有りませぬか、さ、お乘りなされ、お供をしますとすゝめられて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乘れますものか、それでも此樣な淋しい處を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行きませうとて阿關は小褄少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘られぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子、今は此樣に色も黑く見られぬ男になつて居れども、世にある

頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だれがけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さても〳〵の變り樣、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騷ぎ、高坂の息子は丸で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有樣、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顏を合せる度に行々は彼の店の彼處へ坐つて新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、はからぬ人に緣の定まりて、親親の言ふ事なれば何の異存を入れられやう、烟草屋の錄さんにとは思へどもそれはほんの子供心、先方からも口へ出して言ふた事もなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢のやうな戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞はうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際迄も涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬを、我が此樣な丸髷などに、取すましたるやうな姿をいかばかり面憎く思

はれるであらう、ゆめさら左樣した樂しらしい身ではなけれどもと阿關は振返つて錄之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿關に向つてさのみは嬉しき樣子も見えざりき。

廣小路に出づれば車もあり、阿關は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、錄さんとれは誠に失禮なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私はお別れ致します、隨分からだを厭ふて煩はぬやうに、伯母さんをも早く安心しておあげなさりまし、陰ながら私も祈ります、何うぞ以前の錄さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せて下され、左樣ならばと挨拶すれば錄之助は紙づゝみを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴孃のお手より下されたのなれば、難有く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なさゝうの塗り下駄の音、村田の二階も原

閨の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。

この子

口に出して私が我子が可愛いといふ事を申したら、嘸皆様は大笑ひを遊ばしましやう、それは何方だからとて我子の憎いはありませぬもの、取たてゝ何も斯う自分ばかり美事な寶を持つて居るやうに誇り顔に申すことの可笑しいをお笑ひに成りましやう、だから私は口に出して其様な仰山らしい事は言ひませぬけれど、心のうちではほんに〳〵可愛いの憎いのではありませぬ、掌を合せて拜まねばかり辱ないと思ふて居りまする。

私の此子は言はゞ私の爲の守り神で、此様な可愛い笑顔をして、無心な遊をして居ますけれど、此無心の笑顔が私に教へて呉れました事の大層なは、殘りなく口には言ひ盡くされませぬ、學校で讀みました書物、教師から言ひ聞かして呉れ

ました樣々の事は、それはたしかに私の身の爲にもなり、事ある毎に思ひ出してはあゝで有つた、斯うで有つたと一々顧みられまするけれど、此子の笑顏のやうに直接に、眼前、かけ出す足を止めたり、狂ふ心を靜めたはありませぬ、此子が何の氣も無く小豆枕をして、兩手を肩のそばへ投出して寢入つて居る時の其顏といふものは、大學者さまが頭の上から大聲で異見をして下さるとは違ふて、心から底から沸き出すほどの涙がこぼれて、いかに強情我まんの私でも、子供なんぞ些とも可愛くはありませんと威張つた事は言はれませんかつた。

昨年の暮押つまつてから産聲をあげて、はじめて此赤い顏を見せて呉れました時、私はまだ其時分宇宙に迷ふやうな心持で居たものですから、今思ふと情ないのではありますけれど、あゝ何故丈夫で生れて呉れたらう、お前さへ亡つて呉れたなら私は肥立次第實家へ歸つて仕舞ふのに、こんな旦那樣のお傍何かに一時も居やしないのに、何故まあ丈夫で生れて呉れたらう、厭だ、厭だ、何うしても此緣につながれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら、厭な事の、情ない身と此やうな事を思ふて、人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉し

いとは思はず、只々自分の身の次第に詰らなくなるをばかり悲しい事に思ひました。

それですが彼の時分の私の地位に他の人を置いて御覧じろ、それは何んな諦めのよい悟つたお方にしたところが、是非此世の中は詰らない面白くないもので、随分とも酷い、つれない、天道様は是か非かなど丶いふ事が、私の生意気の心からばかりでは有ますまい、必ず、屹度、何方のお口からも洩れずには居りますまい、私は自分に少しも悪い事は無い、間違つた事はして居ないと極めて居りましたから、すべての衝突を旦那さまのお心一つから起る事として仕舞つて、遂に一無二旦那さまを恨みました、又斯らいふ旦那さまを態と見たて丶私の一生を苦しませて下さるかと思ふと實家の親、まあ親です、それは恩のある伯父様ですけれども其人の事も恨めしいと思ひまするし、第一犯した罪も無い私、人の言ふなり温順しう嫁入つて來た私を、自然と此様な運に拵へて置いて、盲者を谷へ突落すやうな事を遊ばす、神様といふのですか何ですか、其方が實に恨めしい、だから此世は厭なものと斯う極めました。

負けない氣といふはいゝ事で、あれで無くてはむづかしい事を遣りのける譯には行かぬ、ぐにやく\柔かい根性ばかりでは何時も人が海鼠のやうだと斯う仰しやるお方もありますろけれど、それも時と場合によつたもので、のべつに勝氣を振廻しても成りますまい、其うちにも女の勝氣、中へつゝんで諸事を心得て居たら宜いかも知れませぬけれど、私のやうな表むきの負けるぎらひは見る人の目からは淺ましくもありましやう、つまらぬ事を持つたものだといふ感は良人の方に却つて多くあつたので御座りましやう、で御座いますけれど私に其時自分を省る考へは出ませぬゆゑ、良人のこゝろを察する事は出來ませぬ、厭な顔を遊ばせば、それが直ぐ氣に障りもするし、小言の一つも言はれましやうなら火のやうに成つて腹だゝしく、言葉返しはつひしか爲ませんかつたけれど、物を言はず物を喰べず、隨分婢女どもには八つ當りもして、一日床を敷いて臥つて居た事も一度や二度では御座りませぬ、私は泣虫で御座いますから、その強情の割合に腑甲斐ないほど掻巻の襟に喰ついて泣きました、唯々口惜し涙なので、勝氣のさせる理由も無い口惜し涙なのでした。

嫁入つたは三年の前、其當座は極仲もよう御座いましたし雙方に苦情は無かつたので御座いますけれど、馴れるといふは好い事の悪い事で、お互ひ我まゝの生地が出て參ります、諸慾が沸くほど出て參りますから、それは〳〵不足だらけで、それに私が生意氣ですものだからつひ〳〵隔てだてに旦那さまが外で遊ばす事にまで口を出して、何うも貴郎は私にかくし立を遊ばして、外の事といふと少しも聞かせて下さらない、それはお隔て心だと言つて恨みまするると、何そんな水臭い事けしない、何も彼も聞かせるではないかと仰しやつて相手にせずに笑つていらつしやるのです、ありありと隠してお出遊ばすのは見えすいて居りますし、さあ私の心はたまりません、一つ疑ひ出すと十も二十も疑はしくなつて、朝夕旦那あれ又あんな嘘と思ふやうになり、何だか其處が可笑しくとぐらかりまして、何うしても上手に思ひとく事が出來ませんかつた、今おもふて見ると成るほど隠しだても遊ばしましたらう、何と言つても女ですもの口が卑いに依つてお務め向きの事などは話してお聞かせ下さるわけには行きますまい、現に今でも隠していらつしやる事は聡しくあります、それは承知で、たしかな様と知つて居りまするけれ

ど今は少しも恨む事をいたしません、なる程ど此話しを聞かして下さらぬが旦那様の價値で、あの位私が泣いても恨んでも取合つて下さらなかつたは旦那様のおえらいので、あの時代のやうな淺墓な私に萬一お役所の事でも聞かして下さらうなら、どのやうの詰らぬ事を仕出來すか、それでなくてさへ随分出入の者の手などを假りて、私の手もとまで怪しい遣ひ物などをよこして、斯らいふ事情で願く歎願をして居ります、此裁判の判決次第で生死の分け目に成りますなど〻言つて、原告だの被告だのといふ人が頼み込んで來たも多くあつたれど、それ〳〵私が一切受附けなかつたは、山口昇といふ裁判官の妻として、公明正大に斷つたのでは無く、家内の揉て居るに其やうの事を言ひ出す餘地もなく、言つて面白くない御用務を聞くよりか默つて居た方がよつぽど洒落て居るといふ位な考へで、幸ひに賄賂の汚れは受けないで濟んだけれど、隔ては次第に重なるばかり、愛情がだんだんと深くなつて、お互ひの心の分らないものに成りました、今思へばそれは私から仕向けたので、私の仕様が惡かつたに相違無く旦那様のお心を何時とは無しにくれさせましたに私が心の行き方が違つた故と今ではつく〴〵後悔の淚がこぼれ

まする。
機嫌に仲の惡かつた時は、二人ともに背き背きで、外へいらつしやるに何處へと問ふた事も無ければ、行先をいひ置かれる事も無い、お留守に他處からお使ひが來れば、どんな大至急要用でも封といふを切つた事は無く、妻とは言へ木偶がお留守居して居るやうに受取一通で追拂つて、それは冷淡に投げて置いたものなれば、旦那さまの御立腹は言はでもの事、はじめは小言を仰しやつたり、異見を遊ばしたり、諭したり、懲めたり遊ばしたのなれど、いかにも私の強情の根が深く、隔しだてを遊ばすといふを楯に取つて、ちつとやそつとの優しい言葉ぐらゐでは動きさうにもなく執拗ぬきしほどに、旦那さま呆れて手をば引き給ふ、また家内に言葉あらそひの有るうちはよきなれども、物言はず睨め合ふやうに成りては、屋根あり、天井あり、壁のあると言ふばかり、野宿の露の霑れさにまさつて、それは冷たい情ない、こぼれる涙の氷らぬが不思議で御座ります。
思へば人は自分勝手なもので、よい時には何事の思ひ出しも有りませぬけれど、苦しいの、厭のと言ふ時に限つて、以前あつた事か、これから迎へる事について

か、大層よさゝうな、立派さうな、結構らしい、事ばかり思ひます、左様いふ事を思ふにつけて現在の有さまが厭で厭で、何うかして此中をのがれたい、此絆を断ちたい、此處さへ離れて行つたならば何んな美しく良い處へ出られるかと、斯らいふ事を是非とも考へます、で御座いますから、私も矢張その通りの夢にうかれて、此様な不運で果るべきが天縁では無い、此家へ嫁入りせぬ以前、また小宮の養女の質子で有つた時に、いろ〳〵の人が世話をして呉れて、種々の口々を申込んで呉れた、中には海軍の潮田といふ立派な方もあつたし、醫學士の細井といふ色白の人にも極まりかゝつたに、引違へて旦那様のやうな無口さまへ嫁入つて来たは何うかいふ一時の間違ひでもあらう、此間違ひを此まゝに通して、甲斐のない一生を送るは實に情ない事と考へられ、我身の心をため直さうとはしないで人ごとばかり恨めしく思はれました。

其やうな詰らぬ考へを持つて、詰らぬ仕向けを致しまする妻へ、何のやうな結構な人なればとて親切で對はれましやうか、お役所から退けてお歸り遊ばすに、お出むかへこそ規則通り致しまするけれど、さし向つては一言の打とけたお話し

も申上げず、怒るならお怒りなされ、何も御随意と木で鼻をくゝるやうな素振をして居ますに、旦那さまは堪へかねて、ふいと立つて家をば御出あそばさるゝ、行先は何れも御神燈の下をくゞるか、待合の小座敷、それをば口惜しがつて私は恨みぬきましたけれど今の智恵で言へば、私の御機嫌の取りやうが悪くて、家のうちには不愉快で居たゝまれないからのお遊び、こんな事をして良人を放蕩に仕あげて仕舞ふたのです、良人は美事家業を外にするといふ道楽者に成つて仕舞ひました。旦那さまだとて金満家の息子株が芸人たちに煽動られて、無我夢中に浮かれ立つとは事が違ふて心底おもしろく遊んだのではありますまい、いはゞ捨鉢へ、憂さ晴らしといふやうな譯で、御酒をめし上つたからとて快くお酔ひになるのではなく、いつも蒼ざめた顔を遊ばして、何時も額際に青い筋が顕はれて居りました。

物いふ聲が　けんどんで荒らかで、假初の事にも婢女たちを叱り飛ばし、私の顔をば尻目にお睨み遊ばして小言は仰しやらぬなれども其お氣むづかしい事と言ふては、現在の旦那様が柔和の相とては少しも無く、恐ろしい凄い、にくらしい

お顏つき、其の方の側に私が憤怒の相で控へて居るのですから召使ひはたまりません、大方一月に二人づゝは婢女は替りまして、其都度紛失物が出來ますやら品物の破損などは夥しい事で、何うすれば此様なに不人情の者ばかり寄合ふのか、世間一體が此樣に不人情なものか、それとも私一人を歎かせやうといふので、私の身に近い者となると悉く不人情に成るのであらうか、右を向いても左を向いても賴もしい顏をして居るは一人も無い、あゝ厭な事だと捨てばちになりまして、逢ふほどの人に愛想をしやうでもなく、旦那樣の御同僚などがお出になつた時分も御馳走はすべて旦那さまのお指圖無いうちは手出しをもした事はなく、座敷へは婢女ばかり出して私は齒が痛いの頭痛のと言つて、お客の有無にかゝはらず勝手氣儘の身持をして呼ばれましたからとて返事をしやうでもない、あれをば他人は何と見ましたか、定めし山口は不作だとでも評して、妻たる者の風上へも置かれぬ女と言はれましてしやう。

あの頃旦那さまが離緣をやると一言仰しやつたが最期、私は屹度何事の思慮もなく暇を頂いて、自分の身の不都合は棚へ上げて、此樣な不運な、情ない、口惜

しい身と天が極めてお置きなさるなら、何うでも宜しい、何となり遊ばしませ、
私は私の考へ通りな事して、惡ければ惡くなれ、萬一よければそれこそ儲け物と
いふやうな無茶苦茶の道理を附けて、今頃私は何に成つて居ましたか、思へば身
ぶるひが出ます、よく旦那樣は思ひ切つた離縁沙汰を遊ばさずに、能うも私を取
止めて置いて下さつた、それはお癇癪の募つて生やさしい離縁などをお出しなさ
るより何時までも檻の中へ置いて苦しませてやらうといふお考へであつたか其處
は解らぬなれども、今では私は何事の恨みも無い、旦那さまへ對して何事の恨み
も無い、あのやうに苦しませて下さつた故今日の樂しみが樂しいので、私がいく
らか物の解るやうに成つたもあゝいふ中を經た故であらう、それを思ふと私の爲
に仇敵といふ人は一人も無くて、あの[illegible]とこましやくれて世間へ私の身のあら
を吹聽して歩いたといふ小間づかひの早も、口返答ばかりして役たゝずであつた
御飯たきの竹も、みんな私の恩人といふて宜い、今とのやうに好い女中ばかり集
まつて、此方の奥樣ぐらゐ人づかひの宜い方は無いと嘘にも褒んだ口をきかれる
は、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟つたからの事、世間に當てもなく人

を苦しめる悪念もなければ、神様だとて徹頭徹尾悪い事の無い人に歎きを見せるといふ事は遊ばすまい、何故ならば、私のやうに身の廻りは悉く心得ちがひばかりで出來上つて、一つとして取柄の無い困り者でも、心として犯した罪が無いほどに、これ此樣な可愛らしい美くしい、此坊やをたしかに授けて下さつたのですもの。

此坊やの生れて來やうといふ時分、まだ私は雲霧につゝまれぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしなかつたのです、だけれども可愛い、いとしい、といふ事は產聲をあげた時から何故となく身にしみて、いろ／＼負け惜しみも言ひましやうけれど、そつくり誰れかゞ持つて行くとでも成つたら私は強情を捨てゝ取ついて、此子は誰れにも指もさゝせぬ、これは私の物と抱きしめたで御座りましやう。

旦那さまの思ひも、私の思ひも同じであるといふ事は此子が抑も敎へて與れたので、私が此子をば抱きしめて、坊は父樣の物ぢやあ無い、お前は母樣一人のだよ、母さまが何處へ行くにしろ坊は必らず置いては行かない、私の物だ私のだと

て烟草を吸ひますと何とも言はれぬ解けるやうな笑顔をして、莞爾々々とします様子の可愛い事、とても／＼旦那様のやうな邪慳の方のお子ではない、これは私一人の物だと斯う極めて居まするに、旦那さまが他處からでもお歸りになつて、不愉快さうなお顏つきで此子の枕もとへお坐り遊ばして、覺束ない手つきに風車を立て／＼見せたり、振りつゞみなどを振つてお見せなされ、一家の内に我を認めるは坊主一人だぞとあの色の黑いお顏をお摺り寄せ遊ばすと、泣くかしら怖ろしがるかしらと見て居ますに、いかにも嬉しい顏をして莞爾々々と私に見せた通りの笑みを見せるでは御座いませぬか、或時旦那さまは、首をひねつてお前も此子が可愛いかと聞しやいました、當然で御座います、とてつんと致して居りますと、それではお前も可愛いなと例に似合ぬ冗談を仰しやつて、高聲の大笑ひを遊ばした時お隣、此子が顏さしに爭はれないほど似た處が御座いました、私は此子が可愛いのですもの、何うして旦那様を憎み通せましやう、私が善くすれば旦那さまも善くして下さります、たとへには三歲兒に淺瀬と言ひますけれど、私の身の一生を教へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした。

わかれ道

上

お京さん居ますかと窓の戸の外に來て、こと／＼と羽目を敲く音のするに、誰れだえ、もう寢て仕舞つたから明日來てお呉れと嘘を言へば、寢たつて宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此樣な遲くに何を言ひに來たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛防おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十餘りの意氣な女、多い髮の毛を忙しい折からとて結び髮にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺なしな半天を着て、急ぎ足に沓脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸

戸を明くれば、お京さまと言ひながらずつと這入るは一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て餘しの小僧なり、年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顏小さく、目鼻だちはきりきりと利口らしけれどいかにも脊の低ければ人嘲りて仇名はつけゝる、御免なさい、と火鉢の傍へづかづかと行けば、お餅を焼くには火が足らないよ、臺所の火消壺から消し炭を持つて來てお前が勝手に焼いてお喰べ、私は今夜中に此れ一枚を上げねばならぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからとて針を取れば、吉はふゝんと言つて彼の禿頭には惜しい物だ、御初穗を己れでも着て遣らうかと言へば、馬鹿をお言ひでない人のお初穗を着ると出世が出來ないと言ふではないか、今つから伸びる事が出來なくては仕方が無い、其樣な事を他處の家でもしては不可よと氣を附けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時か左樣言つたね、運が向く時になると己れに絲織の着物をこしらへて呉れるつて、本當に調製へて呉れるかえと眞面目だつて言へば、それは調製へて上げられるやうならお目出度のだもの喜んで調製へるがね、私が姿

を見てお呉れ、此樣な容貌で人さまの仕事をして居る境界ではなからうか、まあ夢のやうな約束さとて笑つて居れば、いゝやなそれは、出來ない時に調製へて呉れとは言はない、お前さんに運の向いた時の事さ、まあ其樣な約束でもして喜ばして置いてお呉れ、此樣な野郎が糸織ぞろへを被つた處がをかしくも無いけれどもと淋しさうな笑顏をすれば、そんなら吉ちやんお前が出世の時は私にもしてお呉れか、其約束も極めて置きたいねと微笑んで言へば、其奴はいけない、己れは何うしても出世なんぞは爲ないのだから。何故々々。何故でもしない、誰れが來て無理やりに手を取つて引上げても己れは此處に斯うして居るのがいゝのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負つて產て來たのだらうから、燈心を買ひに行く時、かすりでも取つて吹矢の一本も當りを取るのが好い運さ、お前さんなぞは以前が立派な人だといふから今に上等の運が馬車に乘つて迎ひに來やすのさ、だけれどもお妾になるといふ謎では無いぜ、惡く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、左樣さ馬車の代りに火の車でも來るであらう、隨分胸の燃える事があるからね、とお京は尺を杖

に振返りて吉三が顏を諦視りぬ。

例の如く臺所から炭を持出して、お前は喰ひなさらないかと聞けば、いゝえ、とお京頭をふるに、では己ればかり御馳走さまにならうかな、本當に自家の吝嗇奴めやかましい小言ばかり言やがつて、人を使ふ法をも知りやがらない、死んだお老婆さんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等と來たら一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、隨分厭味に出來あがつて、いゝ氣の骨頂の奴ではないか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思はれない、番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが隨分おもしろいよと話しながら、金網の上へ餅をのせて、おゝ熱々と指先を吹いてかゝりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふものであらう、お京さんお前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人子で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと言ふ、左樣かなあ、それでは矢張何でも無いのだらう、何處からか斯うお前のやうな人が己れの眞身の姉さんだとか言つて出て來たらどんなに嬉しいか、首つ玉へ噛り着いて己れはそれぎり往生

しても喜ぶのだが、本當に己れは木の股からでも出て來たのか、つひしか親類らしい者に逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出來ない位なら今のうち死んで仕舞つた方が氣樂だと考へるがね、それでも慾があるから可笑しい、ひよつくり變てこな夢なんかを見てね、平常優い事の一言も言つて呉れる人が母親や親父や姉さんや兄さんのやうに思はれて、もう少し生きて居たら誰れか本當の事を話して呉れるかと樂しんでね、面白くも無い油引きをやつて居るが己れ見たやうな變な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も親父も空つきり當が無いのだよ、親なしで產れて來る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と燒あがりし餅を兩手でたゝきつゝいつも言ふたる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消して、何其樣な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなど〻朋輩の奴等が惡口をいふが、もしかすると左樣かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も親父も乞食かも知れない、表を通る襤褸を下げ

た奴が矢張己れが親類まきで傳手よつて貰ひに來る跛足の婆あ何かゞ己れの親の何に當るか知れはしない、話さないでもお前は大抵知つて居るだらうけれど今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見ては呉れまいねと言ふに、串戯をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそれは知らないが、何だからとつて嫌やがるも厭がらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故其樣な意氣地なしをお言ひだと勵ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顏をば見せざりき。

今は亡せたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲の

やうな老婆樣ありき、六年前の冬の事寺參りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて來て、いゝよ親方からやかましく行つて來たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地惡が置去りに捨てゝ行つたと言ふ、其樣な處へ歸るに當るもんか些とも怕かない事は無いから私が家に居なさい、みんなも心配する事は無い何の此子位のもの二人や三人臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入るものか、判證文を取つた奴でも駈落をするもあれば持逃げの吝な奴もある、料簡次第のものだわな、いはゞ馬には乘つて見ろさ、役に立つか立たないか置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ歸るが厭なら此家を死場と極めて骨を折らなきやならないよ、しつかり遣つてお吳れと言ひ含められて、吉や〳〵と夫れよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻唄交り遣つて退ける腕を見るもの、流石に眼鏡と亡き老婆をほめける。

恩ある人は二年目に亡せて今の主も內儀樣も息子の半次も氣に喰はぬ者のみなれど、此處を死場と定めたるなれば厭やとて更に何方に行くべき、身は疳癪に筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親

の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鐵拳に撲倒す勇氣はあれど誠に父母いかなる日に失せて何の時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ、四季押通し油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も慰むる人なき胸苦しさの餘り、假にも優しう言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取ついて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物に氣才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば傘屋の者へは別して愛想を見せ、小僧さん着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持つてお出、お家は御多人數お内儀さんの針持つていらつしやる暇はあるまじ、私は常住仕事疊紙と首つ引の身なればほんの一針造作は無い、一人住居の相手なしに毎日毎夜さびしく暮して居るなれば手すきの時には遊びにも來て下され、私は此樣ながらがらした氣なれば吉ちやんのやうな暴れさんが大好き、癇癪がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家の洗ひかへしを光澤出しの小槌に、碪うちで

も通りに來て下され、それならばお前さんも人に憎まれず私の方でも大助かり、ほんに兩爲で御座んすほどにと戲言まじり何時となく心安く、お京さんお京さんとて入浸るを職人ども挑發しては 傘屋の大將のあちらこちら、桂川の幕が出る時は お半の脊に長右衞門と唄はせて彼の帶の上へちよこなんと乘つて出るか、此奴は好いお茶番だと笑はれるに、男だら眞似て見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奧の菓子鉢の中に、今日は何が何個あるまで知つて居るのは恐らく己れの外には有るまい、質屋の兀頭めお京さんに首つたけで、仕事を頼むの何が何うしたとか小うるさく這入込んでは前だれの半襟の帶つ皮のと附屆をして御機嫌を取つては居るけれど、つひしか喜んだ挨拶をした事が無い、ましてや夜でも夜中でも傘屋の吉が來たとさへ言へば寢間着のまゝで格子戸を明けて、今日は一日遊びに來なかつたね、何うかお爲か、案じて居たにと手を取つて引入れられる者が他にあらうか、お氣の毒樣なこつたが獨活の大木は役にたゝない、山椒は小粒で珍重されると高い事をいふに、此野郎めと脊を酷く打たれて、有がたう御座いますと濟まして行く顏つき身長さへあれば人串戲とて恕すまじけれど、一寸法師の生意氣と

爪はじきして好い嬲りものに烟草休みの話しの種なりき。

下

十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ誂への日限の遲れしを詫びに行きて、歸りは懷手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころ〳〵と轉げるを、右に左に追ひかけては大溝の中へ蹴落して一人から〳〵と高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さま皓々と照し給ふを寒いといふ事知らぬ身なれば唯こゝちよく爽かにて、歸りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後より追ひすがる人の、兩手に目を隱して忍び笑ひするに、誰れだ誰れだと指を撫でゝ、何だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かしても駄目だよと顏を振のけるに、憎らしい當てられて仕舞つたと笑ひ出す。お京はお高祖頭巾眉深に風通の羽織着て例に似合ぬ宜き粧なるを、吉三は見あげ見おろして、お前何處へ行きなすつたの、今日明日は忙がしくてお飯を喰べる間もあるまいと言ふたではないか、何處へお客樣にあるいて居たのと不審を立てられて、取越

しの御年始さと素知らぬ顏をすれば、嘘を言つてるぜ三十日の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きたすつたかと問へば、とんでもない親類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけだから嘸お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまだ本當とも思はれない、兎も角喜んでお呉れ惡い事では無いからと言ふに、本當か、本當か、と吉は呆れて、嘘では無いか串戲では無いか、其樣な事を言つておどかして呉れなくても宜い、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから其樣な厭な戲言は廢しにしてお呉れ、えゝ詰らない事を言ふ人だと頭をふるに、嘘ではないよ何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乘つて迎ひに來たといふ騷ぎだから彼處の裏には居られない、吉ちやん其うちに糸織ぞろひを調製へて上るよと言へば、厭だ、己れは其樣な物は貰ひたくない、お前その好い運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではないか、一昨日自家の半次さんが左樣言つて居たに、仕事やのお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さんが口入れで何處のかお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、奥さまのお側やお縫物師の

嘘はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着るお妾さまに相違は無いと思ふから、間違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや其處へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何も私だとて行きたい事は無いけれど行かなければならないのさ、吉ちやんお前にもう逢はれなくなるねえ、とて唯言ふととながら萎れて聞ゆれば、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行くのは廢したが宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其樣な事を始めたのか、あんまり情ないではないかと吉は我身の潔白に較べて、お廢しよ、お廢しよ、斷つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張に倦きが來て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此樣な詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つてほゝと笑ひしが、兎も角も家へ行かうよ、吉ちやん少しお急ぎと言はれて、何だか己れは根つから面白いとも思はれない、お前まあ先へお出よと後に附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつ

しか傘屋の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音づれて呉れたのなれど、明日の晩はもうお前の聲も聞かれない、世の中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心がらだとて不滿らしう吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉ちやんやお焙りよと聲をかけるに己れは厭だと言つて柱際に立つて居るを、それでもお前寒からうではないか風を引くといけないと氣を附ければ、引いても宜いやね、構はずに置いてお呉れと下を向いて居るに、お前は何うかおしか、何だか可笑しな樣子だね私の言ふ事が何か癪にでも障つたの、それなら其やうに言つて呉れたが宜い、默つて其樣な顏をして居られると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいゝよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、寄かかりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろいろの人が鳥渡好い顏を見せて直樣つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも善い人であつたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお

嫁に行くを厭がつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨てゝ行くし、もう何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきなんぞ）百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し、朝から晩まで一寸法師の言はれつゞけで、それだからと言つて一生經つても此身長が延びやうかい、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日々々厭な事ばかり降つて來やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐つたのではないと威張つたに、五日とたゝずに兜をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深いお前さんを姉さん同樣に思つて居たが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此處からお禮を申します、人をつけ、もう誰れの事も當てにするものか、左樣なら、と言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ吉ちやんそれはお前勘違ひだ、何も私が此處を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私はほんとに兄弟とばかり思ふのだもの其樣な愛想づかしは酷からう、と後から羽がひじめに抱き止めて、氣の早い子だねとお京の諭せば、そんならお妾に行くを廢め

にしなさるかと振かへられて、誰れも顧ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだからそれは折角だけれど肯れないよと言ふに、吉は淚の眼に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放しておくんなさい。

たけくらべ

一

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騷ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行來はかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてより是れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商ひはかつふつ利かぬ處とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當こと〳〵しく、一

家内これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に慾深様のかつぎ給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりとは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出づれば、うしろに切火打かくる女房の顏もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそこね、恨みはかゝる身のはて危ふく、すはと言はゞ命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかし、娘は大籬の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかく檜舞臺と見立つるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやら〳〵忙がしげに横抱きの小包はとはでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此處か

らあげまする、誂へ物の仕事やさんと此あたりに言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて、女子の後帶きちんとせし人少く、がらを好みて巾廣の卷帶、年增はまだよし、十五六の小癪なるが酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、處がら是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に殘れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ燒鳥の夜店を出して、身代たゝき骨になれば再び古巢への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは能くも學びし露八が物眞似、榮喜が處作、孟子の母やおどろかん上達の速かさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつのりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、學校の唱歌にも　ぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも敎育はむづかしきに敎師の苦心さこそと思はるゝ入谷ぢかくに育英舍とて、私立なれども生徒の數は千人近く、狹き校舍に目白押の窮屈さも敎師が人望いよ〳〵あらはれて、唯學校と一と口にて此あたりには呑込みのつくほど成るがあり、通ふ子供の數々に或は火消鳶人足、おとつさ

んは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言はれて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの貸座敷の祕藏息子寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ附き帽子面もちゆたかに洋服かる〴〵と花々敷を、坊ちやん坊ちやんとて此子の追從するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黑髮も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、發心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性來おとなしきを友達いぶせく思ひて、さま〴〵の惡戲をしかけ、猫の死骸を繩にくゝりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内一の人とて假にも侮りての所業はなかりき、歳は十五、並脊にていが栗の頭髮も思ひなしか俗とは變りて、藤本信如と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

二

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんず勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由斷のなりがたき此あたりのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位えらく成りて、帶は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと鳶人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを徹して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あれば人も憎まぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顏をしをる、去年も一昨年も先方には大人の末社がつきて、まつりの趣向も我れより花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組みも有りき、今年又もや負けにならば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空ゐばりとけなされて、辨天ぼりに水およぎの折も我が組に成る人は多かるまじ、力を言はゞ我が方がつよけれど、

田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が出來るを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成たるも口惜し、まつりは明後日、いよいよ我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまじ、おゝ夫れよりは彼の人の事彼の人の事、藤本のならば宜き智惠も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るかと顏を出しぬ。

己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己れが處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始まつて、夫れといふと奴の仲間がばら〳〵と飛出しやあがつて、どうだらう小さな者の萬燈を打こはしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のざまをと一人がいふと、間抜に背のたかい大人のやうな面をして居る團子屋の頓馬が、頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて惡口を言つ

たとさ、己らあ其時千束様へねり込んで居たもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父さんに頭から小言を喰つて其時も泣寝入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆が寄合つて茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、彼んな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度のまつりには如何しても亂暴に仕掛て取かへしを付けようと思ふよ、だから信さん友達がひに、夫れはお前が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横町組の恥をすゝぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りをる正太郎を取ちめて呉れないか、我れが私立の寝ぼけ生徒といはれゝばお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。萬燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が這

入ると負けるが宜いかへ。負けても宜いのさ、夫れは仕方が無いと諦めるから、お前は何も偽ないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ與れると豪氣に人氣がつくからね、己れは此樣な無學漢だのにお前は學が出來るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷語でも言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、あゝ好い心持ださつぱりしたお前が承知をしてくれゝば最う千人力だ、信さん有がたうと常に無い優しき言葉も出づるものなり。

一人は三尺帶に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帶といふ坊樣仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げしものと大和尚夫婦が贔負もあり、同じ學校へかよへば私立私立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取ること罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひかねて信如、夫れではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は為ぬ方が勝だよ、いよ〳〵先方が賣りに出たら仕方が無

い、弱いざと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の引出から京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく利れさうだねえと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなる事か。

三

解かば足にもとゞくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく髷おもたげの、赭熊といふ名は恐ろしけれど、此髷を此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒繻子と染分絞りの昼夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申しき、大黒屋の美登利とて生国は紀州、言葉のいさゝか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき気象を喜ばぬ人なし、

子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては遣手新造が姉への世辭にも、美いちやん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有かたくも覺えず、まくはまくは、同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を與へしにおろかの事、馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて喜ばせし事もあり、さりとは日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあらず、末は何となる身ぞ、兩親ありながら大目に見てあらき詞をかけたる事も無く、樓の主が大切がる樣子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來りし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出でし譯は此譯、それより奧は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其ほかは心のまゝ、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半襟を袷にかけて着て歩るきしに、田舍者ゐなか者と町内の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事も有しが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な姿と打つ

けの惡まれ口を、言ひ返すものもなくなりぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白い事をしてと友達のせがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事がいゝでは無いか、幾金でもいゝ私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供仲間の女王樣又とあるまじき惠みは大人よりも利きが早く、茶番にしよう、何處のか店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構はしない、やつちよいやつちよい譯なしだと捩ぢ鉢卷をする男子のそばから、夫れでは私たちが詰らない、皆が騷ぐを見るばかりでは美登利さんだとて面白くはあるまい、何でもお前の好い物におしよと、女の一むれは祭りを拔きに常盤座をと、言ひたげの口振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐる〳〵と動かして、幻燈にしないか、幻燈に、己れの處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行らうでは無いか、己れが映し人で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さん夫れにしないかと言へば、あゝ夫れは面白からう、三ちやんの口上ならば誰れも笑はずには居られまい、序にあの顏が

うつると猶おもしろいと相談はとゝのひて、不足の品を正太が買物役、汗に成りて飛び廻るもをかしく、いよ〳〵明日と成りては横町までも其沙汰聞えぬ。

四

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かゝぬ場処も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ真岡木綿に町名くづしを、去歳よりはよからぬ形とつぶやくも有りし、口なし染の麻だすき成るほど太きを好みて、十四五より以下なるは、達磨、木兎、犬はり子、さま〳〵の手遊を数多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴小鈴背中にがらつかせて、駆け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しごいて締めし帯の水浅黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあがりも際立て、うしろ鉢巻きに山車の花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの仲間には入らざりき、夜宮は事

なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合ひしは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで來い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、夫れならば己れが呼んで來る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行けと我が年下に叱られて、おつと來たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれ彼の飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして背ひくゝ、頭の形は才槌とて首みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反歯の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黑きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頰に笑くぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波ちゞみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轅棒にすがる身なり、五十軒によき得意場は持ちたりとも、内證の車は商賣もの丶外なれば詮なく、十三にな

れば片腕と一昨年より並木の活版所へも通ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つゞかず、一と月と同じ職も無くて霜月より春へかけては突羽根の内職、夏は檢査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれば、人には調法がられぬ、去年は仁和賀の臺引きに出しより、友達いやしがりて萬年町の呼名今に殘れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎くむ者の無きも一德なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主樣あだには思ふべしや、三公己れが町へ遊びに來いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし、正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれ〴〵に忍ぶ戀路を小聲にうたへば、あれ由斷がならぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まぢくないの高聲に皆も來いと呼つれて表へ驅け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに耄けて先刻にから呼ぶをも知らぬか、誰樣も又のちほど遊ばせて下され、これは御

世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自らの迎ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄に淋しく、人數はたのみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば喧嘩も三ちやんの樣では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸髷の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも構はず大方臨終は金と情死なさるやら、夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや、廓内の大きい樓にも大分の貸付があるらしう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産を數へぬ。

五

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すゞしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまひの姿見、母親が手づからそゝけ髮つくろひて、我が子ながら美くしきを立ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶ぞいひける、

單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帶少し幅の狹いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと塀の廻りを七度び廻り、欠伸の數も盡きて、拂ふとすれど名物の蚊に首筋額ぎはしたゝか螫れ、三五郎弱りきる時、美登利立出でゝいざと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて驅け出せば、息がはずむ胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前一人でお出でと怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ來し時は正太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、おもしろくない、彼の人が來なければ幻燈をはじめるのも嫌、伯母さん此處の家に智慧の板は賣りませぬか、十六武藏でも何でもよい、手が暇で困ると美登利の淋しがれば、夫れよと卽坐に鋏を借りて女子づれは切拔きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提燈電氣燈、いつも賑ふ五丁町、と諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼりて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騷ぎなれば何事と門に立ちて人垣をつくりし中より。三五郎は居るか、一寸來てくれ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼ぶに、何の用意もなくおいしよ、よし來たと身輕に

敷居を飛こゆる時、此二股野郎覺悟をしろ、横町の面よごし唯は置かぬ、誰れだと思ふ長吉だ生ふざけた眞似をして後悔するなと頰骨一撃、あつと魂消て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゝき殺せ、正太を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頓馬も唯は置かぬと潮のやうに沸かへる騷ぎ、筆屋の軒の掛提燈は苦もなくたゝき落されて、釣らんぷ危なし店先の喧嘩なりませぬと女房が喚きも聞かばこそ、人數は大凡十四五人、ねぢ鉢卷に大萬燈ふりたてゝ、當るがまゝの亂暴狼藉、土足に踏み込む傍若無人、目ざす敵の正太が見えねば、何處へ隱くした、何處へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置くものかと三五郎を取こめて撲つやら蹴るやら、美登利くやしく止める人を掻きのけて、これお前がたは三ちやんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隱くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此處は私が遊び處、お前がたに指でもさゝしはせぬ、ゑゝ憎らしい長吉め、三ちやんを何故ぶつ、あれ又引たふした、意趣があらば私をお擊ち、相手には私がなる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵れば、何を女郎め

頬桁たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相應だと多人數のうしろより長吉、泥草履つかんで投つければ、ねらひ違はず美登利が額際にむさき物したゝか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむる女房、ざまを見ろ、此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕かへしには何時でも來い、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの活地なしめ、歸りには待伏せする、横町の闇に氣をつけろと三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今ぞ知る、それと長吉聲をかくれば丑松文次その餘の十餘人、方角をかへてばら／＼と逃足はやく、拔け裏の露次にかゞむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽靈になつても取殺すぞ、覺えて居ろ長吉めと湯玉のやうな涙はら／＼、はては大聲にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おど／＼と氣を呑まれし、筆やの女房走り寄りて抱き起し、背中をなで砂を拂ひ、堪忍おし、堪忍おし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶

はぬは知れて居る、夫れでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの仔細で御座ります故と筋をあら〳〵折からの巡査に語れば、職掌がらいざ送らんと手を取らるゝに、いえ〳〵送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を含んで頭を撫でらるゝに彌々ちゞみて、喧嘩をしたと言ふと親父さんに叱かれます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて凋れるをすかして、さらば門口まで送つて遣る、叱らるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫でゝはるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振はなして一目散に逃げぬ。

六

めづらしい事、此炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を嫌がるはよく〳〵の不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻に鮨でも誂へようか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎樣への朝參りは母さんが代理してやれば御免

かうむれとありしに、いえ／＼姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば氣が濟まぬ、お賽錢下され行つて來ますと家を驅け出して、中田圃の稲荷に鰐口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畦道づたひに歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夕は御免よと突然にあやまれば、何もお前に謝罪られる事は無い。夫れでも己れが憎くまれて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎を撃たしはしなかつた物を、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふではないか、あの野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍して呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのでは無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪て、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷をするほどでは無い、夫れだが正さん誰れが聞いても私が長

吉に草履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱られるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとほしく、本當に堪忍しておくれ、みんな己れが惡い、だから謝る、機嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものをと話しつれて、いつしか我家の裏近く來れば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、お祖母さんも日がけを集めに出たらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉らへて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、侘びた折戸の庭口より入れば、廣からねども鉢ものをかしく並びて、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの總長屋、流石に錠前くだくもあらざりき、正太は先へあがりて風入りのよき場處を見たてて此處へ來ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持つたへし錦繪かず／＼取出し、褒めらるゝを嬉しく美登利さん昔の羽子板を

見せよう、これは己れの母さんがお邸に奉公して居る頃いたゞいたのだとさ、をかしいでは無いか此大きい事、人の顔も今のとは違ふね、あゝ此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舍の實家へ歸つて仕舞つたから今は祖母さんばかりさ、お前は浦山しいねと無端に親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣く物ではないと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで來て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年寄りだから其うちにも夜は危ないし、目が惡いから印形を捺したり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉れぬと祖母さんが言つて居たつけ、己れが最う少し大人に成ると質屋を出さして、昔の通りでなくとも田中屋の看板をかけると樂しみにして居るよ、他處の人は祖母さんを吝だと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、集金に

行くうちでも通新町や何かに随分可愛想なのが有るから、無お祖母さんを惡くいふだらう、夫れを考へると己れは淚がこぼれる、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らすまいとして働いて居た、夫れを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてえのは可笑しいでは無いか、だから橫町の野蕃人に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを恥かしさうな顏色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れのよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美くしいや、廓內の大卷さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れは何樣に肩身が廣からう、何處へゆくにも隨從て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねえ美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透綾のあら縞で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本當だぜ彼奴は吃度怒るよ、眞靑に成つて怒るよ、にゑ肝だからね、赤くはならない、夫れとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板

に出たら宜いた、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな醜たものと恨めろもをかしく、變た顔にうつるとお前に嫌らはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

朝涼はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお出でな、燈籠ながして、お魚追ひましよ、池の橋が直つたれば怕い事は無いと言ひ捨てに立出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて美くしと思ひぬ。

七

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舍なり、去りし四月の末つかた、櫻は散りて青葉のかげに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原にせし事ありしが、つな引、鞠なげ、繩とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平常の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、

これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして嬉しさうに禮を言つたは可笑しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど〻取沙汰しける、信如元來かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、それよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやして、何とも言はれぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける譯にもゆかねば、成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの一ト言にて濟ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、最初は藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つくれば、おくれし信如を待合して、これ此樣うつくしい花が咲いてあるに、枝が高くて私には折れぬ、信さんは背が高ければお手が届きましよ、後生折つて下されと一むれの中にては年長

なるを見かけて頼めば、流石に信如袖ふり切りて行すぎる事もならず、さりとて人の思はくいよ〳〵愁らければ、手近の枝を引寄せて好悪かまはず申訳ばかりに折りて、投つけるやうにすたすたと行過ぎるを、さりとては愛敬の無き人と惘れし事も有しが、度かさなりての末には自ら故意の意地悪のやうに思はれて、人には左もなきに我れにばかり愁らき処為をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしを為れば怒る、陰気らしい気のつまる、どうして好いやら機嫌の取りやうも無い、彼のやうな六づかしやは思ひのまゝに捻れて怒つて意地わるが為たいならんに、友達と思はずば口を利くも入らぬ事と美登利少し疳にさはりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此処には御法度、岸に添ふておもひ〳〵の道をあるきぬ。

祭りは昨日に過ぎて其あくる日より美登利の学校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき恥辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩に変りは無き筈を、をかしき

分け隔てに常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば付目にして、まつりの夜の處爲はいかなる卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻おし無くば彼れほどに思ひ切りて表町をば荒し得じ、人前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機關の絲を引きしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學は出來るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうな乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺は何ほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川樣、兜町の米樣もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大卷の居ずば彼の樓は闇とかや、さればお店の旦那とても父さん母さん我が身をも粗略には遊ばさず、常々大切がりて床の間にお据ゑなされし瀬戸物の大黒樣をば、我れいつぞや座敷の中にて羽根つくとて騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散々に破損をさせしに、旦那次の間に御酒めし上りながら、美登利お轉婆が過ぎるのと言は

れしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りでは有るまじと、女子達にあと〳〵まで羨まれしも必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいぢめられんは心外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入らぬ物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

八

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頰かぶり、彼女が別れに名殘の一撥、いたさ身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては用心し給へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三嶋様の角までは氣違ひ街道、御顔のしまり何れも緩るみて、はゞかりながら御鼻の下なが〳〵と見えさせ給へば、そんじよ其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、

一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此樣な事にこしらへて、一軒ごとの格子に烟草の無理どり鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息子地廻りと改名して、大門際の喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の賑ひ、送りの提燈いま流行らねど、茶屋が廻女の雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲、うかれうかれて入込む人の何を目當と言問はゞ、赤ゑり赭熊に裲襠の裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處が美いとも申がたけれど華魁衆とて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過ごせば、衣の白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怕からず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故鄕を出立の當時ないて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を徹す姉が身の、憂いの愁らいの數も知らねば、まち人戀ふる鼠なき格子の呪文、別れの背中に手加減の祕密まで、唯おもしろく聞なされて、廓ことばを町にいふまで去りとは恥かしからず思へるも哀なり、年はやうやう數への十四、人形抱いて頬ずりする心は御

華族の御姫樣とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしは學校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派手は美事に、かなはぬは見すぼらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けじ氣性は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寢ぼれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寢の町も門の箒目青海波をゑがき、打水よき程に濟みし表町の通りを見渡せば、來るは來るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを塒にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よか〳〵飴や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黑繻子の幅狹帶、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき痩せ老爺の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤襷させて、あれは紀の國おどらするも見ゆ、お顧客は廓內に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、來るも來るも此處らの町に細かしき貰ひを心に止めず、裾に海松

のいかゞはしき乞食さへ門には立たず行過ぎるぞかし、容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せながら、喉自慢、腕自慢、あれ彼の聲を此町には聞かせぬが憎しと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髮の毛を黄楊の鬢櫛にちやつと掻きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで來ませうとて、はたはた驅けよつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明烏さらりと唄はせて、又御贔負をの嬌音これたやすくは買ひがたし、彼れが子供の處業かと寄集りし人舌を卷いて太夫よりは美登利の顏を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處にせき止めて、三味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の爲ぬ事して見たいと折ふし正太に囁いて聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌やだな。

九

如是我聞、佛說阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺樣の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰兒の襁褓ほしたるなど、お宗旨によ

りて倚ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そゞろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に肥え太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を參らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭より顏より首筋にいたるまで銅色の照りに一點のにごりも無く、白髮もまじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなさる時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉び落ちはすまじきかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいまだ四十の上を幾らも越さで、色白に髮の毛薄く、丸髷も小さく結ひて見ぐるしからぬまでの人がら、參詣人へも愛想よく門前の花屋が口惡る嚊も兎角の蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、總菜のお殘りなどおのづからの御恩を蒙るなるべし、もとは檀家の一人なりしが早くに良人を失なひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同樣、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯ぎよりはじめてお菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま經濟より割出しての御ふびんかゝり、年は二十から違ふて見ともなき事は女も心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場所と人目を恥ぢぬやうになり

けり、にが〳〵しき事なれども女の心だて惡からねば兩家の者もさのみは咎めず、總領の花といふを懷胎し頃、檀家の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隱居さま仲人といふも異な物なれど勸めたてゝ表向きのものにしけるに、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の變屈ものにて一日部屋の中にまぢ〳〵と陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮かはゆらしく出來たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとてお寺の娘に左り褄、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚かられて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうちに此娘を据ゑて愛敬を賣らすれば、秤りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかげ絶えたる事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら經よむやら斯くては身體のつゞき難しと夕暮れの縁先に花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛をなみ〳〵と注がせて、さかなは好物の蒲燒を表町のむさし屋へあら

い處をとの誂へ承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、其嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子供づれの聲を聞けば我が事を誹らるゝかと情なく、そしらぬ顔に鰻屋の門を過ぎては四邊に人目の隙をうかがひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べまじと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは欲深の名にたてど人の風説に耳をかたぶけるやうな少膽にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見ようといふ氣風なれば、霜月の酉には論なく門前の明地に簪の店を開き、御新造に手拭かぶらせて縁喜の宜いのをと呼ばせる趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび素人の手業にて莫大の儲けと聞くに、此雑踏の中といひ誰れも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目には立つまじと思案して、晝間は花屋の女房に手傳はせ、夜に入りては自身おり立て呼たつるに、欲なれやいつしか恥かしさも失せて、思はず聲高に負けましよ負けましよと跡を追ふやうに成りぬ、人波にもまれて買手も眼の眩みし折なれば、現在後世ねがひに一昨日來りし門前も忘れて、簪三本七十五錢と懸直すれば、五本ついたを三錢ならばと直切つて行く、世は

ぬば玉の闇の儲けはこのほかにも有るべし、信如は斯かる事どもいかにも心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近邊の人々が思はく、子供仲間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの狂氣面して賣つて居たなど言はれもするやと恥かしく、其樣な事は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事もありしが、大和尚大笑ひに笑ひすてゝ、默つて居ろ、默つて居ろ、貴樣などが知らぬ事だわとて丸々相手にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてにこにこと遊ばさるゝ顏つきは我親ながら淺ましくて、何故その頭をまろめ給ひしぞと恨めしくもなりぬ。

もとより一腹一對の中に育ちて他人交ぜずの穩かなる家の内なれば、さして此兒を陰氣ものに仕立あげる種は無けれども、性來おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬものぞと諦めればうら悲しきやうに情なく、友朋輩は變屈者の意地わると目ざせども自ら沈み居る心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立出でゝ喧嘩口論の勇氣もなく、部

屋にとぢ籠つて人に面の合はされぬ臆病至極の身なりけるを、學校にての出來ぶりといひ身分がらの卑しからぬにつけて然る弱虫とは知る者なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣になる奴と憎がるものも有りけらし。

たけくらべ

十

祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更くるまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、翌日になりて丑松文次その外の口よりこれこれであつたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を假りられしばかりつくづく迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに背負たるやうの思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、やゝ餘熱のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明巢とは知るまいではないか、何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事もなかつたけれ

ど、萬燈を振込んで見りやあ唯も歸れない、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけた、そりやあ己れが何處までも惡いさ、お前の命令を聞かなかつたは惡からうけれど、今怒られては法なしだ、お前といふ後だてが有るので己らあ大船に乘つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうぢや無いか、嫌やだとつても此組の大將で居てくんねえ、左樣どぢ斗は組まないからとて面目なさゝうに謝罪られて見れば夫れでも私は嫌やだとも言ひがたく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の耻になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ每に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなと見知りの臺屋に咎められしほど成りしが、父親はお辭義の鐵とて目上の人に頭をあげた事なく廓内の旦那は言はずもの事、大屋樣地主樣いづれの御無理も御尤もと受ける質なれば、長吉と喧嘩、

してこれ〳〵の亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんではないか、此方に理が有らうが先方が惡るからうが喧嘩の相手に成るといふ事は無い、謝罪て來い謝罪て來い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場所の愈ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家の赤ん坊が守りをして二錢が駄賃をうれしがり、ねん〳〵よ、おころりよ、と背負ひあるくさま、年はと問へば生意氣ざかりの十六にも成りながら其大躰を恥かしげにもなく、表町へものこ〳〵と出かけるに、いつも美登利と正太が嬲りものに成つて、お前は性根を何處へ置いて來たとからかはれながらも遊びの仲間は外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ。朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の

音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を燒く烟かとうら悲し、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寢の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみ〴〵と實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しき、此ほどの事かゝんもくだ〳〵しや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の池に入水したるを新らしい事とて傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の眞中へ指をさして、何の仔細なく取立てゝ噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開いらいた開らいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と靜かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しと〳〵と降るかと思へばさつと音して運び來るやうな淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたてゝ、中に

集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺はじきの幼げな事して遊ぶほどに、美登利ふと耳を立てゝ、あれ誰れか買物に來たのでは無いか溝板を踏む足音がするといへば、おや左樣か、己いらは些とも聞かなかつたと正太もちう〳〵たこかいの手を止めて、誰れか仲間が來たのではないかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで來たりける足音の聞えしばかり夫れよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

十一

正太は潜りを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぽつ〳〵と行く後影、誰れだ誰れだ、おいお這入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず驅け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかえ、と受けて、嫌な坊主つたら無い、屹度筆か何か買ひに來たのだけ

れど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地惡るの、根性まがりの、ひねつこびれの、吃りの、齒かけの、嫌やな奴め、這入つて來たら散々と窘めてやる物を、歸つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顏を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、おゝ氣味が惡るいと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼ／＼と歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝきぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を數へながら、本當に嫌やな小僧とつては無い、表向きに威張つた喧嘩は出來もしないで、温順しさうな顏ばかりして、根性がぐず／＼して居るのだもの憎くらしからうでは無いか、家の母さんが言ふて居たつけ、瓦落／＼して居る者は心が好いのだと、夫れだからぐず／＼して居る信さん何かは心が惡るいに相違ない、ねえ正太さん左樣であらう、と口を極めて信如の事を惡く言へば、夫れでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやと、生意氣に大人の口を眞似れば、お廢しよ正太

さん、子供の癖にませた樣でをかしい、お前は餘つぽど剽輕ものだね、とて美登利は正太の頰をつゝいて、其眞面目がほはと笑ひこけるに、己らだつても最少し經てば大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、卷煙草を吸つて、履く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして繻珍の鼻緒といふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はくす／＼笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなに可笑しからう、目藥の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此樣な小ぽけでは居ないと威張るに、夫れではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覧、と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人眞面目に成りて、例の目の玉ぐる／＼とさせながら、美登利さんは冗談にして居るのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは

何でも奇麗のが好きだから、煎餅やのお福のやうな痘痕づらや、薪やのお出額のやうなが萬一來ようなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と濕つかきは大嫌ひと力を入れるに、主人の女は吹出して、それでも正さん宜く私が店へ來て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、夫れでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何でも宜いとあるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顏の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、夫れよりも、夫れよりもずんと好いはお前の隣に坐つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰にしようと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの淸元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顏を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好いものかと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と圖星をさゝれて、そんな事を知る物か、何だ其樣な事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、廻れ〳〵水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあ最う一

ら、廻れ〳〵水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあ最う一

度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

十二

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は済めども言はゞ近道の土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しをらしう見えて、縁先に巻きたる簾のさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今様の按察の後室が珠數をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出づるやと思はるゝ、その一ト構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出來たれば、暫時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居ようほどに、と母親よりの言ひつけを、何も嫌やとは言ひ切られぬ温順しさに、唯はい〳〵と小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひた〳〵と、信如は雨傘さしかざして出ぬ。

お齒ぐろ溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒や

の前まで來し時、さつと吹く風大黑傘の上を摑みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずる〳〵と拔けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黑屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくろふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかり急れども、何としても巧くはすげる事の成らぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を摑み出し、ずんずんと裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐またもや落し來て、立かけし傘のころころと轉がり出づるを、いま〳〵しい奴めと腹立たしげにいひて、取留めんと手を伸ばすに、膝へ乘せて置きし小包み意氣地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出から友仙ちりめ

んの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で々椽先の洋傘さすより早く、飛石の上を傳ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顏は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐る／＼門の傍へ寄れば、信如もふつと振返りて、これも無言に脇を流るゝ冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難儀の體を指さして、あれ／＼あの意氣地なしと笑ふて笑ふて笑ひ拔いて、言ひたいまゝの惡まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとて私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちやんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いでは無いか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黑屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能うならぬほどに、餘計な女郎呼はり置いて貰ひましよ、言ふ事があらば陰のくす／＼ならで此處でお

言ひなされ、お相手には何時でも成つて見せまする、さあ何とで御座んす、と袂を捉らへて捲くしかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかげに小隱れて、さりとて立去るまでも無しに唯うぢ〳〵と胸とゞろかすは常の美登利のさまにては無かりき。

十三

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに來しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を縷る心地、憂き事さま〳〵に何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧みねども其人と思ふに、わな〳〵と慄へて顔の色も變るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても履けろ樣には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゝ不器用な彼んな手つきして何うなる物ぞ、紙縷は婆々縷り、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事では無い、夫れ

それ羽織の裾が地について泥に成るは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好いにと一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に侘しきを、厭ひもあへず小隱れて覗ひしが、さりとも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての惡戲は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行きますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを恥かしく、胸はわく〱と上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりとも見過しがたき難儀をさま〲の思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顏を信如のつくるに、えゝ例の通りの心根と遣る瀨なき思ひを眼に集めて、少し涙の恨み顏、何を憎んで其やうに無情そぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上るほど思ひに迫れど、母親の呼聲しば〱なるを侘しく、詮方なさに一ト足二タ足えゝ何ぞいの未練くさい、思はく恥かしと身をかへして、こと〱と飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り

友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゞろに床しき思ひは有れども、手に取あぐる事をもせず空しう眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結ひつけにくる〳〵と見とむなき間に合せをして、これならばと踏試るに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難義は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二タ足ばかり此門をはなるゝにも、友仙の紅葉眼に殘りて、捨てゝ過ぐるにしのび難く心殘りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見ッともないなと不意に聲を懸くる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内よりの歸りと覺しく、浴衣を重ねし唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新しい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆の色、きは〳〵しう見えて誇らし氣なり。

僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲やうかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意氣地なき事を言へば、左樣だらうお前に鼻緒の立ッこは無い、好いや

己れの下駄を履て行ねえ、此鼻緒は大丈夫だよといふに、夫れでもお前が困るだらう。何己れは馴れた物だ、斯うやつて斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其樣な結ひつけなんぞより是れが爽快だと下駄を脱ぐに、お前跣足になるのか夫れでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔らかいから跣足で石ごろ道は歩けない、さあ此れを履いてお出で、と揃へて出す親切さ、人には疫病神のやうに厭はれながら毛虫眉毛を動かして優しき詞のもれ出るぞをかしき。信さんの下駄は己れが提げて行から、臺處へ抛り込んで置いたら仔細はあるまい、さあ履き替へて夫れをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行つてお出、後刻に學校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れるに思ひの留まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

十四

此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひ

すさまじく、此處をかこつけに檢査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとては、天柱くだけ地維かくるかと思はるゝ笑ひ聲のどよめき、中之町の通りは俄に方角の替りしやうに思はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せ〳〵と猪牙がかつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百囀づりより、優にうづ高き大籬の樓上まで、絃歌の聲のさま〴〵に沸き來るやうな面白さは大方の人おもひ出でゝ忘れぬ物に思すも有るべし。正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭の店を見舞ふやら、團子屋の背高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがあるかえといへば、正さんお前好い處へ來た、己れが餡この種なしに成つて最う今からは何を賣らう、直樣煮かけては置いたけれど中途お客は斷れない、何うしような、と相談を懸けられて、智慧無しの奴め大鍋の周邊に夫れッ位無駄がついて居るではないか、夫れへ湯を廻して砂糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて來よう、何處でもみんな左樣するのだお前の店ばかりではない、何此騷ぎの中で良惡を言ふ物が有らうか、お賣りお賣りと言ひながら先に立つて砂糖の壺を引寄すれば、目ッかちの母親おどろいた顏をして、お前さんは本

當に商人に出來て居なさる、恐ろしい智惠者だと賞めるに、何だ此樣な事が智慧者な物か、今横町の潮吹きの處で俺が足りないッて此樣やつたを見て來たので己れの發明では無い、と言ひ捨てゝ、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど何處へ行たか筆やへも來ないと言ふ、廓内だらうかなと問へば、むゝ美登利さんはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から這入つて行た、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髮を斯ういふ風にこんな島田に結つてと、變てこな手つきして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つゝ言へば、大卷さんより猶美いや、だけれど彼の子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向いて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らあ左うすればお前はきつと振られるよ。何故々々。何故でも振られる理由があるのだもの、と顏を少し染めて笑ひながら、夫れじやあ己れも一廻りして來ようや、又後に來るよと捨て臺辭して門に出て、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では

は勤めが身にしみてと口の内にくり返し、例の雪駄の音高く浮きたつ人の中に交りて小さき身躰は忽ちに隱れつ。

揉まれて出でし廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ綿のやうに絞りばなしふさ〱とかけて、鼈甲のさし込、總つきの花かんさしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは抱きつきもせで打守るに、彼方は正太さんかとて走り寄り、お妻どんお前買ひ物が有らば最う此處でお別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左樣ならとて頭を下げるに、あれ美いちやんの現金な、最うお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買ひ物しましよ、とちよこ〱走りに長屋の細露路へ驅け込むに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝かえ昨日かえ何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しをれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭やで仕樣が無い、とさし俯きて往來を恥ぢぬ。

十五

憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、島田の髷のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩でもしたのではないか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顏の赤むばかり、連立ちて團子屋の前を過ぎるに頓馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山の言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顏つきして、正太さん一處に來ては嫌やだよと、置去りに一人足を早めぬ。

お酉さまへ諸共にと言ひしを道引違へて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、あんまりだぜと例の如く甘えてかゝるを振切るやうに物言はず行けば、何の故とも知られねども正太は呆れて追ひすがり袖を留めては怪しがるに、美登利顏のみ打赤めて、何でも無い、と言ふ聲理由あり。

寮の門をばくゞり入るに正太かねても遊びに來馴れて左のみ遠慮の家にもあらねば、跡より續いて椽先からそつと上るを、母親見るより、おゝ正太さん宜く來て下さつた、今朝から美登利の機嫌が惡くて皆なあぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしう惶りて加減が惡るいのですかと眞面目に問ふを、いゝえ、と母親怪しき笑顔をして少し經てば癒りませう、いつでも極りの我まゝ樣、嘸お友達とも喧嘩しませうな、眞實やり切れぬ孃さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲團抱卷持出でゝ、帶と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。

正太は恐る／＼枕もとに寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が惡いのか全體何うしたの、と左のみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを惱ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしのび音の涙、まだ結ひこめぬ前髮の毛の濡れて見ゆるも子細ありとは知るけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出ず唯ひたすらに困り入るばかり、全體何うしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が其樣に腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登

利は眼を拭ふて正太さん私は怒つて居るのでは有りません。

夫れなら何うしてと問はれゝば憂き事さまざま是れは何うでも話しのほかに包ましさなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はずして自づと頰の赤うなり、さして何とはいはれねども次第〳〵に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひをまうけて物の恥かしさ言ふばかりなく、成事ならば薄暗き部屋のうちに誰れとて言葉をかけもせず我が顏ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を經たや、さらば此樣の憂き事ありとも人目つゝましからずば斯く迄物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛さまとをあひ手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ厭々、大人に成るは厭やな事、何故此やうに年をば取る、最う七月十月、一年も以前へ歸りたいにと老人じみた考へをして、正太の此處にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと眼がまはる、誰れも〳〵私の處へ來ては厭やなれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想づかし、正太は何故とも得ず解きか

たく、姉のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこだよ、其樣な事を言ふ筈は無いに、可怪しい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落ついて言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とて夫れに心置くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れゝば最うお友達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言はれて、夫れならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

十六

眞一文字に驅けて人中を拔けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金かをちやらつかせ、弟妹引つれつゝ好きな物をば何でも買への大兄樣、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上げやうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、默つて

居ろ生意氣は吐くなと何時になく荒らい事を言つて、夫れどころでは無いとて急ぐに、何だ何だ喧嘩かと喰べかけの餡ぱんを懐中に捻ぢ込んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何處で始まつた廓内か　鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くば負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さん膽つ玉をしつかりして懸りねえ、と競ひかゝるに、えゝ氣の早い奴め、喧嘩では無い、とて流石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければ最う是れから喧嘩の起りツこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなるものと言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れもたつた今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんはもう近々何處かの坊さん學校へ這入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ねえや、空つきり彼んな袖のぺら〳〵した、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左うなれば來年から横町も表も殘らずお前の手下だよと煽すに、廢して呉れ二錢貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人仲間に有つたとて少とも嬉しい事は無い、着きたい方へ何方へでも着きねえ、

己れは人は憚らない眞の腕ッこで一度龍華寺と遣りたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其樣に早く成つたらう、爲樣のない野郎だと舌打しながら、夫れは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥しきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶〳〵に此處も彼處も怪しき事成りき。

美登利はかの日を始めにして生れかはりし樣の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも恥かし氣に顏のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほゝ笑みては、今にお侠の本性は現れまする、これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を

種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な／＼の弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影そゞろ寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽ては聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有りし意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も恥かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

われから

一

霜夜ふけたる枕もとに吹くと無き風つま戸の隙より入りて障子の紙のかさこそと音するもあはれに淋しき旦那樣のお留守、寢間の時計の十二を打つまで奧樣はいかにするとも睡る事の無くて幾そ度の寢がへり少しは肝の氣味にもなれば、入らぬ浮世のさまぐ\より、旦那樣が去歳の今頃は　紅葉館にひたと通ひつめて、御自分はかくし給へども、他所行着のお袂より、縫とりべりの手巾を見つけ出したる時の憎さ、散々といぢめていぢめて、いぢめ拔いて、もう是れからは決して行かぬ、同藩の澤木が　言葉のいとゑを違へぬ世は來るとも此約束は決して違へぬ、

堪忍せよと謝罪てお出遊ばしたる時の氣味のよさとては、月頃の溜飲が下りて、胸のすくほど嬉しう思ひしに、又かや此頃折ふしのお泊り、水曜會のお人達や、倶樂部のお仲間にいたづらな御方多ければそれに引れて自づと身持の惡う成り給ふ、朱に交はればといふ事を花のお師匠が癖にして言ひ出せども眞にあれは嘘ならぬ事、昔は彼のやうに口先の方ならで、今日は何處其處で藝者をあげて、此樣な不思議な踊を見て來たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば眞面目になりて仰しやりしものなれども、今日此頃のお人の惡さ、憎いほどお利口な事ばかり、お言ひ遊ばして、私のやうな世間見ずをば手の平で揉んで丸めて、それはそれは押へ處の無いお方、まあ今宵は何處へお泊りにて、明日はどのやうな嘘いふてお歸り遊ばすか、夕がた倶樂部へ電話をかけしに三時頃にお歸りとの事、又芳原の式部がもとへでは無きか、あれも縁切りと仰しやつてから最う五年、旦那樣ばかりが惡いのでは無うて、暑寒のお遣ひものなど、憎らしい處置をして見せるに、お心がつひ浮かれて、自づと足をも向け給ふ、ほんに商賣人とて憎らしいものと次第におもふ事の多くなれば、いよ〳〵寢かね　奧樣は縮緬の掻卷打はふりて那

内の蒲團の上に起上り給ひぬ。
八疊の座敷に六枚屏風たてゝ、お枕もとには桐胴の火鉢にお煎茶の道具、烟草盆は紫檀にて朱羅宇の烟管そのさま可笑しく、枕ぶとんの派手模様より枕の總の紅も常に好みの大方に現はれて、蘭奢にむせぶ部屋の内、籠行燈の光かすかなり。

奥様は火鉢を引寄せて、火の氣のありやと試みるに、宵の小間使ひが埋け参らせたる、櫻炭の半は灰になりて、よくも起さで埋けつるは愚きまゝにて冷えしもあり、烟管を取上げて二三服、烟を吹いて耳を立つれば折から此室の軒端に移りて妻戀ひありく猫の聲、あれは玉では有るまいか、まあ此霜夜に屋根傳ひ、何日のやうな風ひきになりて苦しさうな咽をするのであらう、あれも矢つ張いたづら者と烟管を置いて立あがる。化猫よびにと手燭に火を移し平常着の八丈の書生羽織しどけなく引かけて、腰引ゆへる縮緬の、淺黄はことに美くしく見えぬ。
踏むに冷めたき板の間を引摺ながく褄がはに出でゝ、用心口より顔さし出し、玉よ、玉よ、と二聲ばかり呼んで、戀に狂ひてあくがるゝ身は主人が聲も聞き分

けぬ。身にしむやうな媚めかしい聲に大屋根の方へと啼いて行く。えゝ言ふ事を聞かぬ我まゝ猫め、何うともおしと捨ぜりふ言ひて心ともなく庭を見るに、ぬば玉の闇たちおほふて、物の黒白も見え分かぬに、山茶花の咲く垣根をもれて、書生部屋の戸の隙よりわづかに光りほのめくは、おゝまだ下婢は寝ぬさうな。

用心口を鎖してお寝間へ戻り給ひしが再度立つてお菓子戸棚のびすけつとの鑵とり出し、お鼻紙の上へ明けて持ちねり、雪灯を片手に縁へ出れば天井の鼠ががたがたと荒れて、鼬にても入りしかきゝといふ聲もの凄し。しるべの燈火かげゆれて、廊下の闇に恐ろしきを馴れし我家の何とも思はず、侍女下婢が夢の最中に奥さま書生の部屋へとおはしぬ。

お前はまだ寝ないのかえ、と障子の外から聲をかけて、奥様すつと入りたまへば、室内なる男は読書の頭を驚かされて、思ひがけぬやうに惘れ顔をかしう、奥さま笑ふて立ち給へり。

二

机に有りふれの白木作りに　白天竺をかけて、勧工場もの〻筆立てに晋唐小楷の、栗鼠毛の、ペンも洋刀も一つに入れて、首の缺けた亀の子の水入れに、赤墨汁の瓶がおし並び、歯みがきの箱我れもと威を張りて、割據の机に寄りかゝつて、今まで洋書を繙いて居たは年頃二十あまり三つとは成まじ、丸頭の五分刈にて顔も長からず角ならず、眉毛は濃くて目は黒目がちに、一體の容貌好い方なれども、いかにもいかにも田舎風、午房縞の綿入綸なく白木綿の帶、青き毛布を膝の下に、前こゞみになりて兩手に頭をしかと押へし。

奥さまは無言にぴすけつとを机の上に載せて、お前夜ふかしするなら掛るやうにして寒さの凌ぎをして置いたら宜からうに、湯わかしは水になつて、お火と言つたら螢のやうな、よくこれで寒くないのう、お節介なれど私がおこして遣りませう、炭取を此處へと仰しやるに、書生はおそれ入りて、何時も無精を致しまする、申譯の無い事でと有難いを迷惑らしく、炭取をさし出して我れは中皿へ桃を盛つた姿、これは私の道樂さと奥さま炭つぎにかゝられぬ。

自慢も交じる親切に螢火大事さうに挾み上げて、積み立てし炭の上にのせ、四五

逢の新聞三つ四つに折りて、隅の方よりそよ〳〵と煽ぐに、いつしか此れより彼れに移りて、ぱち〳〵といふ音いさましく、青き火ひら〳〵と燃えて火鉢の縁のやゝ熱うなれば、奥さまは何のやうな働きをでも遊ばしたかのやうに、千葉もおあたりと少し押やりて、今宵は分けて寒いものをと、指輪のかゞやく白き指先を、籐編みの火鉢の縁にぞ懸けたる。

書生の千葉いとゞしう恐れ入りて、これは何うも、これはと頭を下げるばかり、故郷に在りし時、姉なる人が母に代りて可愛がりて呉れたりし、其折其頃の有さまを憶ひ起して、あとより奥様が派手作りに田舎ものゝ姉者人がいさゝか似たるよしは無けれど、中學校の試驗前に夜明しをつゞけし頃、此やうな事を言ふて、此やうな所作をして、其上には蕎麥掻きの御馳走、あたゝまるやうにと言ふて呉れし時もありし、なつかしき其昔、有難きは今の奥樣が情と、平生お世話になりぬる事さへ取添へて、怒り肩もすぼまるばかり畏まりて有るさまを、奥さま寒さうなと御覧じて、お前羽織はまだ出來ぬかえ、仲に頼んで大急ぎに仕立てゝ貰ふやうにお爲、此寒い夜に綿入一つで辛防のなる筈は無い、風でも引いたら何うお

毒だ、本當に身體を厭はねばいけませぬぞえ、此前に居た原田といふ勉強ものが矢つ張お前の通り明けても暮れても、紙魚のやうで、遊びにも行かなければ、寄席一つ聞からでもなしに、それはそれは感心と言はうか恐ろしいほどで、特別認可の卒業と言ふ間際まで恙なしに行つてのけたを、惜しい事にお前、肺病になつたでは無からうか、國元から母さんを呼んで此處の家で二月も介抱させたのだけれど、遂には何が何やら無我夢中になつて、思ひ出しても情ない、謂はゞ狂死をしたのだね、私はそれを見て居たゆゑ、勉強家は氣が引ける、懶惰られては困るけれど、煩はぬやうに心がけてお呉れ、別けてお前は一粒物、親なし、兄弟なしと言ふでは無いか、千葉家を負ふて立つ大黒柱に異狀が有つては立直しが出來ぬ、さうでは無いかと奥様身に比べて言へば、はッ、はッ、と答へて詞は無かりき。

奥様は立上つて、私は大層邪魔をしました、それならば成るべく早く休むやうにお爲、私は行つて寢るばかりの身體、部屋へ行く間の事は寒いとても仔細はなきに、構ひませぬから此れを着てお出、遠慮をされると憎くなるほどに何事も默

つて年上の言ふ事は聞くものと奥樣すつとお羽織をぬぎて、千葉の背後より打着せ給ふに、人肌のぬくみ背に氣味わるく、麝香のかをり滿身を襲ひて、お禮も何といひかぬるを、よう似合ふのうと笑ひながら、雪洞手にして立出給へば、蟋蟀いつか三分の一ほどになりて、檐端に高し木がらしの風。

三

落葉たくなる頃の末か、それかあらぬか冬がれの庭木立をかすめて、裏通りの町屋の方へ、朝毎に靡くを、それ片町の奥樣がお目覺だと人わらひの一つに數へれども、習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂、これの濟までは箸も取られず、一日怠る事のあれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうに氣になるといふも、聞く人の耳には洒落者の道樂と取られぬべき事、其身になりては誠に詮なき癖をつけて、今更難儀と思ふ時もあれど、召使ひの人々心を得て御命令なきに眞柴折くべ、お加減が宜しう御座りますと朝床のもとへ告げて來れば、もう廢しませうと幾度か思ひつゝ、習慣かはらぬ贅澤の一つ、さなご入れたる糠袋にみがき上げて、出づ

れば更に濃い化粧の白ぎく、是れも今更やめられぬやうな肌になりぬ。

年を言はゞ二十六、遅れ咲の梢にしぼむ頃なれど、扮装のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほど若う見られぬる徳の性、お子様なき故と髪結の留は言ひしが、あらばいさゝか沈着くべし、いまだに娘の心失せで、金歯入れたる口元に何う為い、彼う為い、仔細らしく数多の奴婢をも使へども、旦那さま勧めて十軒店に人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く、お高祖頭巾に肩掛引まとひ、良人の君もろ共川崎の大師に参詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何処のであらうと囁かれて、奥様とも言はれぬる身ながらこれを浅からず嬉しらて、いつしか好みも其の様に、一つは容貌のさせし業なり。

目鼻だちより髪のかゝり、歯ならびの宜い所まで似たとは愚か母様を其まゝの生れつき、奥様の父御といひしは赤鬼の與四郎とて、十年の前までは物すごい目を光らせて在したるものなれど、人の生血をしぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の脳充血、一朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はじきをされて後生いかゞと思はるゝ様な

りし。
此人始めは大藏省に月俸八圓頂戴して、兀ちよろけの洋服に毛繻子の洋傘さしかざし、大雨の折たも車の贅はやられぬ身なりしを、一念發起して帽子も靴も取つて捨て、今川橋の際に夜明しの蕎麥搔きを賣り初し頃の勢ひは千鈞の重きを提げて大海をも跳り越えつべく、知る限りの人舌を卷いて驚くもあれば、猶武者の向ふ見ず、やがて元も子も摺つて情なき樣子が思はるゝと後言も有けらし、須彌も出たつ足もとの、其當時の事少しいはゞや、哀につらぬく露の玉との與四郎にも戀はありけり、幼馴染の妻に美尾といふ身がらに合せて高品に美くしき其よし十七ばかりなりしを天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて、役所がへりの竹の皮、人にはしたゝれるほど濃つぽき姿と後指さゝれながら、妻や待つらん夕烏の聲に二人とも睦の栞の物を買ふて來るやら、朝の出がけに水瓶の底を掃除して、日手桶を持たせぬほどの汲込み、貴郎お湯炊きで御座いますと言へば、おいと答へ米かし桶に挟り出すほどの愉ろさ、斯くて終らば千歳も美しき夢の中に過ぎぬべらぞ見えし。

らは御心配なく、お就寝下されと洒然といひて隣の妻を歸しやり、一人淋しく洋燈の光りに烟草を喫ひて、忌々しき土産の折は鼠も喰べよとくゞ縁のまゝ勝手元に投出し、明夜は床に入りしかど、さりとは肝癪のやる瀬なく、よしや如何なる用事ありとても、我なき留守に無斷の外出、殊更家内明放しにして、これが人の妻の仕業かと思ふにあまりの事と胸は沸くやうになりぬ。明くれば日曜、終日寢て居ても咎むる人は無し、枕を相手に夢路を辿ひて、表の格子には錠をおろしたまゝ、人訪へども音もせず、いたづらに午後四時といふ頃になりぬれば、車の門に止まりて優しき駒下駄の音の聞ゆるを、彼なゝそれとは知れども知らぬ顔に空寢を作れば、美尼は格子を押して見て、これは如何な事、錠がおりてあると獨り言をいつて、隣家の松の垣根に添ひて水口の方へと廻つて入りた。昨日の午後より背中の拵さんが病、癪氣で御座んすさうな、つよく胸先へさし込みまして、一時はとても此世の物では有るまいと言ふたれど、お醫者さまの度ト注射やら何やらにて、何事も無く治りのつき、今日は一人でお廁にも行かれるやうに成ました、右の譯故の手間どり、昨日家を出まする時も、氣がわく〳〵

して何事も思はれず、後にて思へば締りも附けず、庭口も明け放して、嘸かし貴郎のお怒り遊ばした事と氣が氣では無かつたなれど、病人見捨てゝ歸る事もならず、今日も此やうに遲くまで居りまして、何處までも私が惡う御座んすほどに、此通り謝罪ますほどに、何うぞ御免し遊ばして、いつものやうに打解けた顏を見せて下され、御機嫌直して下されと詫ぶるに、さて左樣かと少し我の折れて、それならば其樣に、何故はがきでも寄越しはせぬ、馬鹿な奴がと叱りつけて、母親は無病壯健の人とばかり思ふて居たが癪といふは始めてかと睦じう語り合ひて、與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき。

四

浮世に鏡といふ物のなくば、我が妍をも醜きをも知らで、分に安んじたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隱して、美色の前だれ奥床しうて過ぎぬべし、よろづに淡々しき女子心を來て搖するやうな人の賞め詞に、思はず赫と上氣して、昨日までは打すてし髮の毛つやらしう結びあげ、端折かゞみ取上げて見れば、いから

雨はれての後一日、今日ならではの花盛りに、上野をはじめ隅田へかけて夫婦づれを樂しみ、隨分とも存る限りの體裁をつくりて、取つて置きの一てう羅も良人は黒紬の紋つき羽織、女房は唯一筋の博多の帶しめて、昨日甘えて買ふて貰ひし黒ぬりの駒下駄、よしや疊は擬ひ南部にもせよ、くらぶる物なき時は嬉しくて立出でぬ、さても東叡山の春四月、雲に見紛ふ木の間の花も今日明日ばかりの十七日なりければ、廣小路より眺むるに、石段を降り昇る人のさま、さながら蟻の塔を築き立つるが如く、木の間の花に衣服の綺羅をきそひて、心なく見る目には保養この上も無き景色なりき、一人は櫻が岡に登りて今の櫻雲臺が傍近く來し時、向ふより五六輛の車かけ聲いさましくして來るを、諸人立止まりてあれあれと言ふ、見れば何處の華族樣なるべき、若き老ひたるとり交ぜに、派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老けし形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物、今樣ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥深く入るを、憎さげに評いふて見送るもあり、唯大方にお立派なといひて行過ぐるもありしが、美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて

眺め入りし風情、うすら淋しきやうに物おもはしげにて、何れ華族であらうお化粧が濃厚だと與四郎の振かへりて言ふを耳にも入れぬらしき樣にて、我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに與四郎心ならず、何うかしたかと氣遣ひて問へば、餘り氣分が勝れませぬ、私は向島へ行くのは廢めて、此處から直ぐに歸りたいと思ひます、貴郎はゆるりと御覽なりませ、お先へ車で歸りますと力なさゝうに萎れて言へば、それはと與四郎案じ始めて、一人では何も面白くは無い、又來るとして今日は廢めにせうと美尾がいふまゝ優しう同意して呉れる嬉しさも、此折何とも思はれず、せめて歸りは鳥でも喰べてと機嫌を取られるほど物がなしく、逃げ出すやうにして一散に家路を急げば、興ことゝ〳〵く醒めて與四郎は唯お美尾が身の病氣に胸をいためぬ。

けかたき夢に心の行かゝ一トり、お美尾は何ゆゑ我れにかくらす、人目無ければ涙に袖をおし濡らし、何ゆゑと問ふ人も無ければ大空に向つて泣かれて、知りたき事はぶりながら與四郎への言譯をいふにも似ず、うれしき時、其返事して、胸の鬱れば我れも胸ふさぐらし、お氣に入らぬものなら離縁して下され、無理にもおいて

とは頼みませぬ、私にも生れた家が御座んするとて威丈高になるに男もとらへず邪慳な振廻して、さあ出て行けと怖の拍子危くなれば、流石に女氣の悲しき聲音に迫りて、貴郎は私をいぢめ出さうとなさるので御座んすか、私が身はそも〳〵から貴郎に上げたものなれば、憎くば打つて下され、殺して下され、此處を死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより憎くはあらぬ妻の事、離別などゝは時の威嚇のみなれば、縋りて泣くを好い時機に、我儘者めの言ひじらけ、心安きまゝ駄々と發して可愛さは猶日頃に倍るべし。

五

與四郎が方に變る心なければ、一日も百年も同じ日を送れども其頃より美尾が樣子の兎に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ、與四郎心をつけて物事を見るに、さながら戀に心をうばゝれて空虚に成し人の如く、お美尾お美尾と呼べば何えと答ふる詞の力なさ、何うでも日々の務めばかりに送り

て身は此處に心は何處の空を彷徨ふらん、一々氣にかゝる事ども、我が女房を人に取られて知らぬは良人の鼻の下と指さゝれんも口惜しく、いよ／＼眞に其事あらばと恐ろしき思案をさへ定めて美尾が影身とつき添ふ如く護りぬ、されども是れぞの疵もなく、唯うか／＼と物おもふらしく、或時はしみ／＼と泣いて、お前樣いつまでこれだけの月給取つてお出遊ばすお心ぞ、お向ふ邸の旦那さまは、其昔大部屋あるきのお人なりしを一念ばかりにてあの御出世、馬車に乘つてのお姿は何のやうの惡武者だとて立派らしう見えるでは御座んせぬか、お前樣も男なりや、少しも早く此樣な古洋服にお辨當さげる事をやめて、道を行くに人の振かへるほど立派のお人になつて下され、私に竹の皮づゝみ持つて來て下さる眞實が有らば、お役所がへりに夜學なり何なりして、何うぞ世間の人に負けぬやうに、一ッぱしの豪い方に成つて下され、後生で御座んす、私は其爲にならば内職なりともして御茶の物のお手傳ひはしましよ、何うぞ勉強して下され、拜みますと心から泣いて、此ある甲斐なき生計を數へれば、與四郎は我が身を罵られし事と腹だゝしく、お爲ごかしの夜學沙汰は、我れを留守にして身の樂みを思ふ故ぞと一圖にくやしく、

何うせ己は此樣な意氣地なし、馬車は思ひも寄らぬ事、此後辻車ひくやら知れたもので無ければ、今のうち身の納りを考へて、利口で物の出來る、學者で好男子で、年の若いに乘かへるが隨意であらう、向ふの主人もお前の姿を褒めて居ろさうに聞いたぞと、跡でもなき根すり言、懶惰者だ懶惰者だ、おれは懶惰者の意氣地なしだと人の字に並べて、夜學はもとよりの事、明日は勤めに出ぬさへ憂がりて、一寸もお美尼の傍を離れじとするに、あゝお前樣は何故其樣に聞分けてドさらぬぞと淺ましく、互ひの思ひそはそはに成りて、物言へば頓て爭ひの絲口を引出し、泣いて恨んで搯れ〳〵の中に、さりとも憎からぬ夫婦に折節の仕となし忘れ難く、貴郎斷うなされ、あゝなされと言へば、お美尼お美尼と目の中へも入れたき思ひ、近隣合壁つゝき合ひて物爭ひに口を利く者は無かりし。

ありし梅見の留守のほど、實家の迎ひとて金紋の車の來し頃よりの事、お美尼は兎角に物おもひ靜まりて、深くは良人を諫めもせず、うつ〳〵と日を送つて實家への足いとゞしう近く、歸れば襟に腮を埋めてしのびやかに吐息をつく、良人の不審を立つれば、何うも心惡う御座んすからとて食も能うは喰べられず、[illegible]

がちに氣無精に成りて、次第に顔の色の蒼きを、一向きに病氣とばかり思ひぬれば、與四郎限りもなく痛心しうて、醫者にかゝれの、藥を飲めのと悋氣は忘れて此事に心を盡しぬ。

されどもお美尼が病氣はおめでたき方なりき、三四月の頃よりそれとは定かになりて、いつしか梅の實落る五月雨の頃にもなれば、隣近處の人々よりおめでたう御座りますかと明らかに言はれて、折から少し苦るしくとも半天のぬがれぬ恥かしさ、與四郎は珍らしく嬉しきを、夢かとばかり迎へられて、此十月が當る月とあるを、人には言はれねども指を折る思ひ、男にてもあれかしと果敢なき事を占ひて、表面はつれなく作れども、子安のお守り何くれと、人より聞きて來た事を其まゝ、不案内の男の身なれば間違ひだらけ取添へて、美尼が母に萬端を頼めば、お前さんより私の方が少し功者さ、と參られて、成るほど成るほどと口を噤みぬ。

六

月給の八圓はまだ昇給の沙汰も無し、此上小兒が生れて物入りが嵩んで、人手が入るやうになつたら、お前がたが何とする、美尾は虚弱の身躰なり、良人を助けて手内職といふもむつかしかるべく、二人居縮んで乞食のやうな活計をするも、餘り褒めた事では無し、何なりと口を見つけて、今の内から心がけ最う少しお金になる職業に取かへずば、行々お前がたの身の振かたは無く、第一子を育つる事もなるまじ、美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく、贅澤を言ふのでは無けれど、お寺參りの小遣ひ位出して貰はう、上げましやうの約束でよこしたのなれども、もとより呉れられぬは横着ならで、何うする事のならぬ意氣地の無さゆゑ、それは思ひ絶つて私は私の口を濡らすだけに、此年をして人樣の口入れやら手傳ひやら、老恥ながらも命の無き世を經まする、されども當て無しに苦勞は出來ぬもの、つく〴〵お前夫婦の働きを見るに、私の手足が働かぬ時になりて何分のお世話をお賴み申さればならぬ曉、月給八圓で何う成らう、それを思ふと今のうち覺悟を極めて、少しは厭ひにつらき事なりとも當分夫婦別れして美尾は子ぐるみ私の手に預かり、お前さんは獨身になりて、官員さまのみに

は限らず、草鞋を穿いてなりとも一廉の働きをして、人並の世の過ごされるやうに心がけたが宜からうでは無いか、美尾は私の娘なれば私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ、何もお前さんの思案一つと母親お美尾の産前よりかけて、萬づの世話にと此家へ入り込みつゝ、兎もすれば與四郎を責めるに、齒ぎしりするほど腹立しく、此老婆は仆すに事は無けれど、唯ならぬ身の美尾が心痛、延いては子にまで及ぼすべき大事と胸をさすりて、私とても男子の端で御座りますれば、女房子位過ぐされぬ事も御座りますまいし、一生は長う御座ります、墓へ這入るまで八圓の月給ではあるまいと思ひますに、其邊格別の御心配なくと見縊にいへば、母親はまだらに殘る黑き齒を出して、成るほど／＼宜く立派に聞えました、左樣いふて呉れねば嬉しうない、流石は男一疋、その位の考は持つて居て呉れるであらう、成るほど成るほどと面白くもない點頭やうをする憎さ、美尾は母さん其やうな事は言ふて下さりますな、家の人の機嫌損ふても困りますとうろ／＼するに、與四郎は心おごりて、馬鹿婆めが、どのやうに引剝からうとすればとて、美尾は我が物、親の指圖なればとて別れるやうな薄情にてあるべきや、殊更今より可愛き

物さへ出來んに二人が中は萬々歳、天の原ふみとゞろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視おろして、離れぬものに我れ一人さだめぬ。

十月中の五日、與四郎が退出間近に安らかに女の子生れぬ、男と願ひしそれには違へども、可愛さは何處に變りのあるべき、やれお歸りかと母親出むかふて、流石に初孫の嬉しさは、親のふたりの機嫌にもしろく、これ見て下され、何と好い兒ではないか、此はあ嬉い事と差つけられて、今更ながらまご／＼と嬉しく、手をさし出すもいさゝか恥かしけれど、母親に抱かせるまゝさし覗いて見るに、誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分ねども、何とは知らず怪しう可愛くて、其啼く聲は昨日まで隣の家に聞きたるのと同じ物には思はれず、さしも危く思ひし事のさりとは事なしに了りしかと重荷の下りたるやうに覺ゆれば、産婦の様子いかにやと覗いて見るに、高枕にかゝりて鉢卷にみだれ髮の姿、痛ましきまで窶れたれど其美くしさは神々しきやうに成りぬ。

七夜の、宮參りの、唯あわたゞしうて過ぎぬ、子の名は紙へ書きつけて産土神の前に御鬮のやうにして引けば、常磐のまつ、たけ、蓬萊の、つる、

かめ、それは探りも當てずして、與四郎が假の筆すさびに、此樣な名も呼よいもの上書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにとて諸人の愛を受けて果報この上も無きものなれ、小野のそれならねどお町は美くしい名と家內いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

七

お町は高笑ひするやうになりて、時は新玉の緣になりぬ、お美尾は日々に安からぬ面色、折には涙にくるゝ事もあるを、血の道の故と自らいへば、與四郎は左のみに疑はず、只この子の大うならんことをのみ祈りて、例の洋服すがた美事ならぬ勤めに手辨當さげて昨日も今日も出でぬ。

お美尾の母は東京の住居も物うく、はしたなき朝夕を送るに飽きたれば、一つはお前樣がたの世話をも省くべきため、つれ〴〵御懇命うけましたる從三位の軍人樣の、隱居の別に御營繕の事ありて、お邸の後方へ建築られしを幸ひ、其處の女中頭として勤めは生涯のつもり、老らくも貯ふて給するべき約束さだまりたれば、

もう此地には居ませぬ、又來る事あらば一泊はさせて下され、その外の御厄介には成りませぬと言ふに、與四郎は左りとも一人の母親なれば、美尾が心細さも思ひやりて、お前も御老年のこと、いかに勤めよきとても、他人場の奉公といふ事させましては、子たる我々が申譯の言葉なし、是非に止まり給へと言へども、いやいや其樣の事お前樣出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬとて單身の風呂敷づゝみ、谷中の家は借家の札はられて、舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ。

越えて一ト月、雲黑く月くらき夕、與四郎は居殘りの調べ物ありて、家に歸りしは日くれの八時、例に薄ぐらき洋燈のもとに風車犬張子取ちらして、まだ母親の名も似合ぬ美尾が懷おしくつろげ、稚兒に添乳の美くしきさま見るべきを、格子の外より覗ふに燈火ぼんやりとして障子に映るかげも無し、お美尾お美尾と呼びながら入るに、答へは隣の方に聞えて、今參りますと言ふ句は似たれど言葉はあらぬ人なりき。

隣の妻の入來るを見るに、懷には町を抱きたり、與四郎胸さわぎのして、美尾は何處へ參りました、此日暮に燈火をつけ放しで、買物にでも行きましたかと問

われから

われから

へば、隣の妻は肩を寄せて、さあ其事で御座んすとて、睡り覺めたる町がくすりくすりとむづかるを、おゝ好い子好い子と、ゆすぶつて言葉絶えぬ。

燈火は私が唯今點けたので御座んす、誠は今までお留守居をして居ましたのなれど、家のやんちやがむづかしやを言ふに小言いふとて明けました、御新造は今日の晝前、通りまで買物に行つて來まする、歸りまで此子の世話をお頼みと仰しやつて、唯しばらくの事と思ひしに、二時になれども三時はうてども音も無くて今まで影の見えられぬは、何處まで物買ひにお出なされしやら、留守たのまして日の暮れし程心づかひなものは無し、まあ何うなされたので御座んしよな、と問ひかけられて、これは我れより尋ねたき思ひ、不斷着のまゝで御座りましたかと問へば、はあ羽織だけ替へて行かれたやうで御座んす、何か持つて行きましたか、いえ其やうには覺えませぬとあるに、はてなと腕の組まれて、此遲くまで何處にと覺束なし。

無器用なお前樣が此子いぢくる譯にも行くまじ、お歸りになるまで私が乳を上げましやうと、有さま見かねて、隣の妻の子を抱いて行くに、何分お頼み申しま

すと言ひながら、美尾の行方に心を取られてお町が事はうはの空になりぬ。

よもや、よもや、と思へども、晴れぬ不審に疑ひの雲になりて、唯一棹の箪笥の抽斗より、柳行李の底はかとなく調べて、もし其跡の見ゆるかと捜るに、戀ひとけしの道具も變らず、つねづね寶のやうに大事がりて、身につく物の随一好たりし手絡の帯あげも其まゝにありけり、いつも小遣ひの入れ場處なる鏡臺の抽斗明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れるやうな新紙幣ばかり、其數およそ二十も重ねて上に一通、與四郎は見るより仰天の思ひになりて、胸は大波の立つ如く、扨こそ理由にありけれと狂ふて、其文披けば唯一言、美尾は死にたるものに御座候、行方をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をとの願ひに御座候。

與四郎は忽ち顏の色靑く赤く、唇を震はせて惡婆、と叫びしが、怒氣心頭に起つて、身よりは黒焔りの立つが如く、紙幣も文も寸斷々々に裂いて捨てゝ、すつくと立ちしさま人見なば如何なりけん。

八

浮世の慾を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとては、人には赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死灰のやうに終りたる、それが名残の鴻金、今の金村恭助ぬしは、其與四郎が聟なりけり、彼の人あれ程の身にて人の姓をば名告らずともと誹りしも有けれど、心安う志す道に走つて、内々頼み欲しさの無きは、これ皆養父が賜物ぞかし、されば奥様の町子おのづから寵愛の掌に乘つて、強ち良人を何うとなけれども、舅姑おはしまして當つ邸に堅くるしき嫁御寮の身と異り、見たしと思はゞ作り目無の芝居行きも誰れかは苦情を申すべき、花見、月見に旦那さま倶し立てゝ、興につらぬる袖を樂しみ、お歸りの遲き時は何處までも電話をかけて、夜は更くるとも寐給はず、餘りに戀しう懐かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、如何なる故とも知るに難けれど、旦那さま在しまさぬ時は心細さ堪へがたう、兄とも親とも頼もしき方に思はれぬ。

さりながら折節地方遊説などゝて三月半年のお留守もあり、湯治場歩きのそれ

と異れば、此時には甘ゆる事もならで、唯徒らの御文通、互ひの封の中人には見せられぬ事多かるべし。

此の御中に何とてお子の無き、相添ひて十年餘り、夢にも左樣の氣色はなくて、淸水堂のお木偶さま幾度空しき願ひになりけん、旦那さま淋しき餘りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、奥さまの好みむつかしければ、是れも御縁は無くて過ぎゆく、落葉の霜の朝な〳〵深くて、吹く風いとゞ身に寒く、時雨の宵は女子ども炬燵の間に集めて、浮世物がたりに小兒の噂、ざれたる婢女は輕口の落しばなしゝて、お氣に入る時は御褒美の何や彼や、人に物を遣りたまふ事は幼少よりの道樂にて、それを父親一もなく愛がりし、一口に言はゞ機嫌かひの質なりや、一言心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛ら、車夫の茂助が一人子の與太郎に、此新年旦那さま召おろしの斜子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり、假初の恐痴に新年宵の御座りませぬよし大方に申しゝを、頓てあはれみての賜り物、茂助は天地に拜して、人は鷹の羽の定紋いたづらに目をつけぬ、何事も無くて奥樣、書生の千葉が寒かるべきを思しやり、物縫ひの仲といふに命じて、

仰せなれば背くによし無く、少しは投やりの氣味にてありし、飛白の綿入れ羽織ときの間に仕立させ、彼の明る夜は着せ給ふに、千葉は御恩のあたゝかく、口に數々のお禮は言はねども、氣の弱き男なれば涙さへさしぐまれて、仲働きの福に賴みてお禮しかるべくと言ひたるに、渡り者の口車よく廻りて、斯樣々々しかじかで、千葉は貴女泣いて居りますと言上すれば、おゝ可愛い男と奥樣御贔負のまさりて、お心づけのほど今までよりはいとゞしう成りぬ。

十一月の二十八日は旦那さまお誕生日なりければ、年毎お友達の方々招き參らせて、座の周旋にそんじよ其れ者の美しきを選りぬき、珍味佳肴に打とけの大愉快を盡させ給へば、髭むしやの鳥居さまが口から、逢ふた初手から可愛さがと恐れ入るやうな御喝采をうかゞふのも、例の澤木さまが落人の梅川を遊ばして、お前の父さん孫いもんさんとお國元をあかし給ふも皆この折の隱し藝なり、されば派手者の奧さま此日を晴れにして、新調の三枚着に今歳の流行を知らしめ給ふ、世は冬なれど陽春三月のおもかげ、散り過ぎたる紅葉は庭に淋しけれど、座の山茶花折しり顏に匂ひて、松の緑のこまやかに、醉ひすゝまぬ人なき日なりける。

今歳け別けてお客樣の數多く、午後三時よりとの招待狀一つも空しう成りしは無くて、暮れ過ぐるほどの賑ひは座敷に溢れて茶室の隅へ逃るゝもあり、二階の手摺りに洋服のお轉女郎、眼鏡が中だと笑はるゝもありき、町子はいとゞ方々の持はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の雨の降るに、御免遊ばせ、私は能う頂きませぬほどにと盃洗の水に流して、さりとも一盃二盃は逃れがたければ、いつしか耳の根あつう成りて、胸の動悸のくるしう成るに、外しては濟まねども人しらぬうちにと庭へ出でゝ池の石橋を渡つて築山の背後の、お稻荷さまが社前なるお賽錢箱へ假初に腰をかけぬ。

九

此家は町子が十二の歳、父の與四郎抵當ながれに取りて、それより修繕は加へたれども、水の流れ、山のたゝずまひ、松の木がらし小高き峰も唯その昔のまゝなりけり、町子は醉ごゝち夢のごとく頭をかへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびた、

わくから

るもみゆ、夜あらしさつと吹連格子に音づるれば、人なきに鈴の音からんとして、障子の紙ゆらぐも淋し。

町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ歸らんとしたりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の臺石に寄かゝり、木の間もれ來る座敷の騷ぎを遙かに聞いて、あゝあの聲は旦那樣、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意氣な洒落ものに成り給ひし、油斷のならぬと思ふと共に、心細き事堪へがたう成りて、締つけられるやうな苦しさは、胸の中の何處とも無く湧き出でぬ。

良久しうありて奥さま大方醉も醒めぬれば、酒におのが亂るゝ怪しき心を我れと叱りて、歸れば杯盤狼藉の有さま、人々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、如何樣お立ちの際にぎはしく散會の後は時雨になりぬ。

恭助は太く疲れて禮服ぬぎも敢へず横になるを、あれ貴郎お召物だけはお脊へ遊ばせ、それではいけませぬと羽織をぬがせて、帶〻も奥さま手づから解きて、糸織のなえたるにふらんねるを重ねし寢間着の小袖めさせかへ、いざ御就寢と手

をとりて扶ければ、何其樣に醉ふては居ないと仰しやつて、蹌踉ながら寢間へと入給ふ。奥さま火のもとの用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寢よと仰しやつて、同じう寢間へは入給へど、何故となう安からぬ思ひのありて、言はねども面色のたゞならぬを、旦那さま半睡の目に御覧じて、何故寢ぬか、何を考へて居るぞと尋ね給ふに、奥さま何とお返事の聞かせ參らする事もあらねど、唯々不思議の心地が致しまする、何う致したので御座りましやう、私にも分りませぬと言へば、旦那さま笑つて、餘り心を遣ひ過ぎた結果であらう、氣さへ落つければ直ぐ癒る事と仰しやるに、否それでも私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります、餘り先刻みな樣のお強ひ遊ばすが五月蠅さに、一人庭へと逃げまして、お稻荷さまのお社の邊で醉ひを醒まして居りましたに、私は變な變な、をかしい事を思ひよりまして、笑つて下さりますな、何うも何とも言はれぬ氣持に成りました、貴郎には笑はれて、叱られるやうな事で御座りましよと下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ。

奥さまは例に似合ず沈みに沈んで、私は貴郎に捨てられは爲ぬかと存じまして、

それで此樣に淋しう思ひますると言ひ出れば、又かと旦那さま無造作に笑つて、誰れが何を言ふたか、一人で考へたか、其樣なつまらぬ事のある筈はない、お前のおもふて呉れるほど世間はわしを思ふて呉れぬから、まあ安心して居るが宜いと譯も無い事に言ひ捨つれば、それでも私は其やうな悋氣沙汰で申すのでは御座りませぬ、今日の會席の賑かに、種々の方々御出の中に誰れとて世間に名の聞えぬも無く、此やうのお人達みな貴郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しさ胸の中におさへがたく、陰ながら拜んで居ても宜いほどの辱さなれど、つく〴〵我が身の上を思ひまするに、貴郎はこれより彌ます〳〵の御出世を遊ばして、世の中廣うなれば次第に御器量まし給ふ、今宵小梅が三味に合せて勸進帳の一くさり、悋氣ではなけれどあれほどの御修業つみしも知らで、何時も昔の貴郎とおもひ、淺き心のそこはかとなく知られまする内、御厭はしさの種も交るべし、限りも知れず廣き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理、有限りだけの家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過しまする身の、遂には厭かれまするやうになりて、悲しかるべき事今おもふてもつらし、私は貴郎のほかに頼母しき兄弟

も無し、有りてから父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに肝の痛とて寄せつけも致されず、朝夕さびしらて暮らしましたるを、嬉しき緣にて今斯く私が我まゝをも免し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿體ないほどの有難さも、若し身にそぐなはぬ事ならばと案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあられぬほどの情なさより、言ふてはならぬと存じましたれど、つひ此樣に申上げて仕舞ました、それは何れも取止めの無き取とし苦勞で御座りましやうけれど、何うでも此樣な氣のするを何としたら宜う御座りますか、唯々心ぼそう御座りますとて打泣くに、旦那さま愚痴の僻見の跡先なき事なるを思侶し、悋氣よりぞと可笑しくもありける。

一

我れと我が身に持て惱みて奧さま不覺に打まどひぬ、此明くれの空の色は、晴れたる時も曇れる如く、日の色身にしみて怪しき思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたゝくに似て、淋しきまゝに琴取出し獨り好みの曲を奏でるに、我

れと我が調亂れになりて、いかにするとも彈くに得堪へず、涙ふりこぼして押やりぬ、ある時は婦女どもに凝る肩たゝかせて、心うかれるやうな戀のはなしなどさせて聞くに、人の顏のけづるゝ可笑しさとて笑ひ轉けるやうな埒のなきさへ、身には一々憐れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり、一夜偏倚きの福ごゑを改めて、言はねば人の知らぬ事、いふて我の德にならぬを、無言にあられませぬはお性香の癖、お聞になつても知らぬ顏にて居て下さりませ、此處になかしき一條の物がたりと少し粟地に膝をはずますれば、それは何ぞや、お聞かされませ書生の千葉が初戀のあはれ、國もとに居りました時そと見初めたが御座りましたさうな、田舍者のことたれば鎌を腰へさして藁草履で、手拭に草束ねを包んでと思召しましやうが、中々左樣では御座りませぬ美くしいにて、村長の娘といふやうな人ださうで御座ります、小學校へ通ふうちに淺からず思ひましてと言へば、それは何方からと小間使ひの米が口を出すに、默つてお聞、無論千葉さんの方からさとあるにへおやあの無骨さんがとて笑ひ出すに、奥樣苦笑ひして可哀さうに失敗の昔話しを探り出したのかと仰しやれば、いえ中々其やうに迷方の非ばかりでは御座り

ませぬ未だ追々にと衣紋を突いて咳拂ひすれば、小間使ひ少し顏を赤くして似合頃の身の上、惡口の福が何を言ひ出すやらと尻目に睨めば、それにかまはず唇を嘗めて、まあお聞遊ばせ、千葉が其子を見初ましてからの事、朝學校へ行まする時は必ず其家の窓下を過ぎて、聲がするか、もう行つたか、見たい、聞たい、話したい、種々の事を思ふたと思召せ、學校にては物もいひましたろ、顏も見ましたろ、それだけでは面白う無うて心いられのするに、日曜の時は其家の前の川へ必らず釣をしに行きましたさうな、鮒やたなごは宜い迷惑な、釣るほどに釣るほど、夕日が西へ落ちても歸るが惜しく、其子出て來よ殘り無くお魚を進つて、喜ぶ顏を見たいとでも思ふたので御座りましよ、あゝは見えますれど彼れで中々の苦勞人といふに、それはまあ幾つの年其戀出來てかと奧樣おつしやれば、當てて御覽あそばせ先方は村長の娘、此方は水許めし上るお百姓、雲にかけ橋、霞に千鳥など〳〵奇麗事では間に合ひませぬ程どに、手短かに申さうなら提燈に釣鐘、大分其處に隔てが御座りますけれど、戀に上下の無いものなれば、まあ出來たと思召しますか、お米どん何と〳〵顏を出されて、何か言はせて笑ふつもりと惡推

をすれば、私は知らぬと横を向く、奥樣少し打笑ひ、成立たねばこそ今日の身であろ、其樣なが萬一あるなら、あの打かぶりの亂れ髮、洒落氣なしでは居られぬ筈、勉強家にしたは些自狂からかと仰しやろに、中々もちまして彼男が貴女自狂など起すやうな男で御座りましよか、無常を悟つたので御座りますと言ふに、そんならば其子は亡くなつてか、可哀さうなと奥樣あはれがり給ふ、福は得意に、此戀いふも言はぬも御座りませぬ、子供の事なれば心にばかり思ふて、表向きには何ともない月日を大凡どの位送つたもので御座んすか、今の千葉が樣子を御覽じても、彼れの子供の時ならばと大抵にお合點が行きましよ、病氣して煩つて、お寺の物になりましたを、其後何と思へばとて答へるものは松の風で、何うも仕方がなからうでは御座んせぬか、さてそれからが本文で御座んすとて笑ふに、福が能い加減なこしらへ言、似つこらしい嘘を言ふと奥さま爪はじき遊ばせば、あれ何しに嘘を申しませう、さりながらこれをお耳に入れたといふと少し私が困りの筋、これは當人の口から聞いたので御座りますと言へば、嘘をお言ひ、彼男が何うして其樣な事を言けう、よし有つてからが、恥い醜でおし默つて居るべき筈、いよ

いよの噂を仰しやれば、さても情ない事、其様に私の事を信仰して下さりませぬは、昨日の朝下栗が私を呼びまして、奥様が此四五日御すぐれ無いやうに見上げられる、何う遊ばしてかと如何にも心配らしく申しますので、奥様はお血の故で折節悩き症にもおなり遊ばすし真實お悪い時は暗い處で泣いて居らつしやるがお持前と言ふたらば、何んなにか貴女喫驚致しまして、飛んでもない事、それは大層な癇癪質で、悪くすると取かへしの附かぬ事になると申しまして、それで其時申しました、私が郷里の幼友達に是れ〳〵斯ら言ふ娘があつて、肝もちの、はつきりとして、此郷の奥様に何うも能く似て居た人であつた、繼母があつたので不當の我慢が大抵ではなく、積つて病死した可愛さうな子と何れ彼の男の事で御座りますから、面目た顔であり〳〵を言ひましたを、私がはぎ合せて考へると今申したやうな事になるので御座ります、其子に奥様が似ていらつしやると申したのはそれは噂では御座りませぬけれど、露顕しますと彼男に叱られます、御存じないおつもりでと舌を廻して、たゞき立る太鼓の音さりとは賑しう聞え渡りぬ。

一

十一

今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路にいそがはしく、お出入の町人お歳暮持參するものお勝手に賑々しく、急ぎたる家には餅つきの音さへ聞ゆるに、此邸にては煤取の笹の葉座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下に散みだれ、お雜巾かけまする者、お疊たゝく者、案内の調度搬び廻るもあれば、お振舞の酒に醉ふて、これが荷物になるもあり、御懇命うけまするお出入の人々お手傳お手傳ひとて、五月蠅きを半ば斷りて集まりし人だけに瓶のぞきの手拭、それと切つて分け給へば、一同手に手に打冠り、姉さま唐茄子、頬かぶり、吉原かぶりをするもあり、旦那さま朝よりお留守にて、お指圖し給ふ奥さまの風を見れば、小褄かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の庭草履を召して、あれよ、これよと仰せらるゝ、一しきり終りての午後、お茶菓子山と搬び込めば大皿の鐵砲まき分捕次第と沙汰ありて、奥樣は暫時のほど二階の小間に氣づかれを休め給ふ、血の道の強き人なれば胸ぐるしさ堪へがたうて、枕に小搔卷假初に

、

ふし給ひしを、小間使ひの米よりほか、絶えて知る者あらざりき。

奥樣とろ〳〵としてお目覺むれば、枕もとの襖がはに男女の話し聲さのみ憚かる景色も無く、此宿の旦的の、奥州のと、車宿の二階で言ふやうなるは、奥さま此處にと夢にも思はぬなるべし。

一方は仲働の福のこと、叮嚀に叮嚀にと仰しやるけれど、一日業に何うして左樣は行渡らりやう、隅々隈々やつて居ておたまりがあらうかえ、目に立つ處をざつと働いて、あとは何れも野となれさ、それで丁度いゝ加減に疲れて仕舞う、そんなにお前正直で勤まるものかと嘲笑ふやうに言へば、大きにさといふ、相手は茂助がもとの安五郎が聲なり、正直といへば此處の旦的が一件物、飯田町のお波が事を知つてかと問ひかけるに、お福は百年も前からと言はぬばかりにして、それを御存じの無いは此處の奥樣お一方、知らぬは亭主の反對だね、まだ私は見た事は無いが、色の淺黒い面長で、品が好いといふではないか、お前は親方の代りにお供を申すこともある、拜んだ事があるかと聞へば、見た段か格子戸に鈴の音がすると坊ちやんが先立ちで驅け出して來る、續いて現はれるが例物さ、髮の毛

自慢の櫛卷で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて、おや貫郎と言ふだらうではないか、すると此處のがでれりと御座つて、久しう無沙汰をした、免せ、かなんかで、入口の敷居に腰をかける、例のが驅け下りて靴をぬがせる、見ともないほど睦ましいと言ふは彼れの事、旦那が奥へ通ると小戻りして、お供さん御苦勞、これで烟草でも買つてと言つて、それ鼻藥の出る次第さ、あれがお前素人だから感心だと賞めるに、素人も素人、生無垢の娘あがりだと言ふではないか、旦那とは十何年の中で、坊ちやんが歳もとしは十か十一には成らう、都合の惡いは此處の家には一人も子寶が無うて、彼方に立派の男の子といふものだから、行々を考へるとお氣の毒なは此處の奥さま、何うも是れも授かり物だからと一人が言ふに、仕方が無い、十分先の大旦那がしぼり取つた身上だから、人の物に成ると言つても理屈は有るまい、だけれどお前、不正直は此處の旦那であらうと言ふに、男は皆あんなもの、氣が多いからとお福の笑ひ出すに、惡く當つ擦りなさる、耳が痛いではないか、己れは斯う見えても不義理と土用干は仕た事の無い人間だ、女房をだまくらかして妾の處へ注ぎ込むやうな不人情は仕たくて

も出來ない、あれだけ腹の太い豪いのではあらうが、考へると此處の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて彌々根が張らうと、傍人なげに遠慮なき高聲、福も相續の調子に、もう一働きやつてのけやう、安さんは下廻りを賴みます、私はもう一度此處を拭いて、今度はお藏だとて、雜巾がけしつ／＼と始めれば、奥さまは唯との隔てを命にして、明けずに去ねかし、顏みらるゝ事辛やと思しぬ。

十二

十六日の朝ぼらけ昨日の掃除のあと淸き、納戸めきたる六疊の間に、置炬燵して旦那さま奥さま差向ひ、今朝の新聞おし披きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他處目うらやましう見えて、面白げなりしが、旦那さま好き頃と見計らひの御つもりなるべく、年來足らぬ事なき家に子の無きをばかり口惜しく、其方にあらば重疊の喜びなれど若しいよ／＼出來ぬものならば、今より貰ふて心に任せし教育をしたらばと是れを明くれ心がくれども、未だに良きも見當らず、年たてば我れも初老の四十の坂、じみなる事を言ふやうなれども家の根

つきの極まらざるは何かにつけて心細く、此ほど中の其方のやうに、淋しい淋しいの言ひづめも爲ではあられぬやうな事あるべし、幸ひ海軍の鳥居が知人の子に素性も惡からで利發に生れつきたる男の子あるよし、其方に異存なければ其れを貰ふて丹精したらばと思はるゝ、悉皆の引うけは鳥居がして、里かたにも彼の家にて成るよし、年は十一、容貌はよいさうなと言ふに、奥さま顏をあげて旦那の面樣いかにと覗ひしが、成程それは宜い思召より、私にかれこれは御座りませぬ、宜いと思しめさばお取極め下さりませ、此家は貴郎のお家で御座りまするもの、何となり思召しのまゝにと安らかには言ひながら、萬一その子にて有りたらばとつれなき思ひおのづから顏に顯はるれば、何取いそぐ事でもない、よく思案して氣に叶ふたらば其時の事、あまり氣を鬱々として病氣でもしては成らんから、少しは慰めにもと思ふたのなれど、それも深り輕率の事、人形や雛でけ無し、人一人玩弄物にする譯には行くまじ、出來そこねたとて塵塚の隅へ捨てられぬ、家の礎に貰ふものなれば今一應思定めもし、取調べても見た上の事、唯この頃のやうに鬱いで居たら身體の爲になるまいと思はれる、これは氣がぬ事として、ちと寄

席きゝにでも行つたら何うか、播磨が近い處へかゝつて居る、今夜は何うであらう行かんかなと機嫌を取り給ふに、貴郎は何故そんな優しらしい事を仰しやります、私は決して其やうな事は伺ひたいと思ひませぬ、騒ぐ時は騒がせて置いて下され、笑ふ時は笑ひますから、心任にして置いて下され、と言ひて流石打つけには恨みも言ひ敢へず、心に締めて憂はしげの躰にてあるを、良人は淺からず氣にかけて、何故そのやうな捨てばちは言ふぞ、此間から何かと奥齒に物の挾まりて一々心にかゝる事多し、人には取違へもあるもの、何をか下心に含んで隠しだてゞはないか、此間の小梅の事、あれでは無いかな、それならば大間違ひの上なし、何の氣も無い事だに心配は無用、小梅は八木田が年來の持物で、人には指をさゝしはせぬ、ことには彼の痩せがれ、花は疾くに散つて紫蘇葉につゝまれやうと言ふものだに、何れほどの物好きなればとて手出しを仕やうぞ、邪推も大抵にして置いて呉れ、あの事ならば潔淨無垢、潔白なものだと微笑を含んで口髭を捻らせ給ふ。飯田町の格子戸は音にも知らじと思召し、これが備へは立てもせず、防禦の策は執らざりき。

十三

さま〳〵物をおもひ給へば、奥樣時々お癪の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦しみ、初めは皮下注射など醫者の手を待ちけれど、日毎夜毎に度かさなれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、男ならでは甲斐のなきに、其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立てゝ、反かへる背を押へさするに、武骨一遍律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく、しのびやかの囁き頓て無沙汰になるぞかし、隱れの六疊をば人奥樣の御部屋と名けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目からかや此間の事いぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ取添へて、仰々しくもなりぬるかな、あとなき風も騷ぐ世に忍ぶが原の蟲の聲、露ほどの事あらはれて、奥樣いとゞ憂き身になりぬ。

中働きの福かねてあら〳〵心組みの、奥樣お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろ〳〵千葉の厄介になりたればとて、これを新年着に仕立て

て遣はされし、其恨み骨髓に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髮結の留を捉へて珍事唯今出來の醜つきに、例の口車くる〳〵とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風說は太りけん、いつしか恭助ぬしが耳に入れば、安からぬ事に胸さわがれぬ、家つきならずば離縁すべき途もあれども、浮世の聞え、これを別居と引放つこと、如何にもしのびぬ思ひあり、さりとて此まゝ措かんに、內證のみだれ世の攻擊の種子になりて、淺からぬ難儀現在の身の上にかゝれば、いかにせばやと持てなやみぬ、我まゝも其まゝ、氣隨も其まゝ、何かはことごとしく咎めだてなどなさんやは、金村が妻と立ちて、世に恥かしき事なからずはと思へども、さし置がたき沙汰とにかくに喧しく、親しき友など打つれての勸告に、今日は今日はと思ひ立ちながら、猶其事に及ばずして過行く、年立かへる朝より、松の內過ぎなばと思ひ、松とり捨つれば十五日ばかりの程にはとおもふ、二十日も過ぎて一月空しく、二月は梅にも心の急がれず、來る月は小學校の定期試驗とて飯田町のかたに、笑みかたまけて急ぎ合へるを、見れども心は樂しからず、家のさま、町子の上、いかさまにせん、とばかりおもふ、谷中に知人の家を

われから

買ひて、調度萬端納めさせ、此處へと思ふに町子が生涯あはれなる事いふばかりなく、暗涙にくれて我が身が不徳と思しゝる筋なきにあらねど、今はと思ひ斷ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ。

かねてぞ千葉は放たれぬ。汨羅の屈原ならざれば、恨みは何とかこつべき、大川の水淸からぬ名を負ひて、永代よりの汽船に乘込みの歸國姿、まさしう見たりと言ふ者ありし。

憂かりしはその夜のさまなり、車の用意何くれと調へさせて後、いふべき事あり此方へと良人のいふに、今さら恐ろしうて書齋の外にいたれば、今宵より其方は谷中へ移るべきぞ、此家をば家とおもふべからず、立歸らるゝものと思ふな、罪はおのづから知りたるべし、はや立て、とあるに、それは餘りのお言葉、我に惡き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞きませぬとて泣くを、恭助振向いて見んともせず、理由あればこそ、人並ならぬ事ともなせ、一々の罪状いひ立んは憂かるべし、車の用意もなしてあり、唯のり移るばかりと言ひて、

つと立ちて部屋の外へ出給ふを、追ひすがりて袖をとれば、放さぬか不埒者と振切るを、お前様どうでも左様なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私はひとりもの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふにわけはあるまじ、美事すてゝ此家を君の物にしたまふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨てゝ後悔ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。

われから

うらむらさき

上

夕暮の店先に郵便脚夫が投込んで行きし女文字の書狀一通、炬燵の間の洋燈のかげに讀んで、くる〳〵と帶の間へ卷收むれば起居に心の配られて物案じなる事一通りならず、おのづと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、いえ、格別の事でも御座りますまいけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、此方から行けば宜いのなれど、やかましやの良人が暇といふては毛筋ほども明けさせて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から送らせうほどにお良人に願ふて鳥渡來て呉れられまいか、待つて居る、と云ふ文面で御

座ります、又まゝ娘と紛紜でも起りましたのか、氣の狹い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人の性分、困りもので御座ります、とて態との高笑ひをして聞かせれば、はて扨氣の毒なと太い眉を寄せて、お前にすればたつた一人の同胞、善惡ともに分けて聞かねばならぬ役を笑ひ事にしては置かれまい、何事の相談か行つて樣子を見たらば宜からう、女は氣の狹いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるであらうを、お前の斷りを私の故に取られて恨まれても德の行かぬ事、夜は格別の用も無し、早く行つて聽いて遣るがよからう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき許しの願はずして出るに、飛立つほど嬉しいを此方は態と色にも見せず、では行きませうかと不勝々々に簞笥へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何れほど待つて居るか知れはせぬぞ、と知らぬ事なれば憐性の旦那どの急き立つるに、心の鬼やおのづと面ほてりして、胸には動悸の波たかゝり。

糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にお高祖頭巾、脊の高き人なれば夜風を厭ふ角袖外套のうつり能く、では行つて來ますると店口に駒下駄直させながら、太吉、

太吉と小僧の脊を人さし指の先に突いて、お前こぐ眞似に睡の出て店の品をばちよろまかされぬやうにしてお吳れ、私の歸りが遲いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るならいつでも床の中へ入れて置いては成らないぞえ、さんは臺所の火のもとを心づけて、旦那のお枕もとへは例の通りお湯わかしにお烟草盆、忘れぬやうにして御不自由させますな、成るたけ早くは歸らうけれど、と格子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言ふてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘たるき言葉、何の商人の女房が店から車に乘出すは榮耀の沙汰で御座ります、其處らの角から能いほどに直切つて乘つて參りましよ、これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帶じみた事をと旦那どのが恐悦、見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げてほつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいとゞ雲深う成りぬ。

何處の姉樣からお手紙が來やうぞ、眞赤な嘘をと我家の見返られて、何事も御存じなしによいお顏をして暇を下さる勿體なさ、あのやうな疑の無い、物疑ひといふては露ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸に欺

しつけて心のまゝの不義放埒、これがまあ人の女房の所業であらうか、何といふ悪者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生のやうな心であらう、此様ないたづらの畜生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかのやうに可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる御思召有難い嬉しい恐ろしい、餘りの勿躰なさに涙がこぼれる、あのやうな良人を持つ身の何が不足で鐵の火渡りするやうな危険い計較をするのやら、可愛さうにあの人の好い仲町の姉さんまでを引合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまあ何處へ向く、思へば私は悪黨人でなし、いたづら者の不義者の、まあ何といふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらず、横町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはら〳〵とこぼれぬ。

良人の名は小松原東二郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房のお律が手ばしこさ奥も表も平手に揉んで、美くしい眦に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元からお客様への世辞も出る、年もねつから行きなさらぬにお恰悧なお内

儀さまと見るほどの人褒め物の、此人此身が裏道の働き、人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が心ざし生憎疑はる心地してお律は路傍に立すくみしまゝ、行くまいか行くまいか、寧思ひ切つて行くまいか、今日までの罪は今日までの罪、今から私が氣さへ改めれば、彼のお人とてさのみ未練は仰しやるまじく、お互ひに淺い交際をして人知らぬうちに汚れを雪いで仕舞つたなら、今から後のあの方の爲、私の爲、生中とがれて附纏ふたとて、晴れて添はれる中ではなし、可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何とせう、私は兎も角あの方はこれからの御出世前一生を暗黒にさせましてそれで私は滿足に思はれやうか、おゝ厭な事恐ろしい、何と思ふて私は逢ひに出て來たか、よしやお文が千通來やうと行さへせねばお互ひ瑕には成るまいもの、もう思ひ切つて歸りませう、歸りませう、歸りませう、歸りませう、えゝもう私は思ひ切つたと路を違へて駒下駄を返せば、生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる想、又もやふつと吹破られて、えゝ私は其やうな心弱い事に引かれてならうか、最初あの家に嫁入する時から、東二郎どのを良人と定めて行つたのでは無いものを、形は行つても心は決して遣る

まいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理はり、惡人でも、いたづらでも構ひは無い、お氣に入らずばお捨てなされ、捨てられゝば結句本望、あのやうな惡物樣を良人に奉つて吉岡さんを袖にするやうな拗へを、何故しばらくでも持つたのであらう、私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい、良人を持たうと奧樣お出來なさらうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて與れやうと、私の良人は吉岡さんの外には無いものを、もう何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六步かけ出せば、胸の動悸のいつしか絕えて、心靜かに氣の冴えて色なき唇には冷かなる笑みさへ浮びぬ。（未定稿）

萬葉文庫 3

昭和二十一年十一月一日印刷
昭和二十一年十一月五日發行

樋口一葉小説
全集第三卷

定價十八圓

編集、發行者　森前
東京都世田谷區代田一ノ七六三

印刷者　吉野實
東京都四谷區荒木町四

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

發行所　萬葉出版社
東京都世田谷區代田一ノ七六三
電話世田谷五一八一番

日本出版會會員番號 A 231017